

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

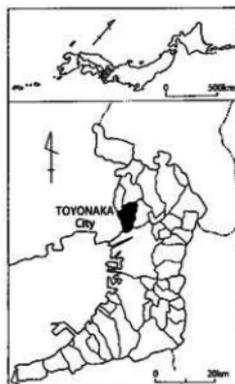
平成 26 年度 (2014 年度)

平成 27 年 (2015 年) 3 月

豊中市教育委員会

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成 26 年度 (2014 年度)



平成 27 年 (2015 年) 3 月

豊中市教育委員会

## 序 文

豊中市は、大阪府の北西部に位置し、西は兵庫県と接しています。千里丘陵にかつて広大な森林を控えたこの地は、神崎川や猪名川から常に豊かな水がもたらされ、古くから人々の生活の場が育まれてきた結果、多くの歴史的遺産が受け継がれてきました。その一方、商都大阪に隣接する関係により、早くから大阪北郊のベッドタウンとしての開発が進められてきた結果、すみやかに埋蔵文化財の保護に取り組む必要がありました。近年になって開発の勢いは落ち着いてきたものの、土地利用の形態が変化してきたことを受けて小規模開発が急増し、住宅の老朽化に伴う建て替えも依然として多く、埋蔵文化財の保護について迅速な対応が求められています。

本書は郷土の文化財としての埋蔵文化財の重要性を踏まえ、国の補助を受けて実施した緊急発掘調査の概要報告です。今回は、平成26年度に調査を実施した穂積遺跡、蛭池遺跡、ならびに各遺跡における確認調査に加え、平成25年度後期に実施した新免遺跡、各遺跡における確認調査も掲載いたしました。穂積遺跡では中世の井戸が10基以上検出され、蛭池遺跡では奈良時代の掘立柱建物跡が確認され、新免遺跡では弥生時代中期の竅穴住居や古墳時代後期の掘立柱建物跡が確認されるなど、各遺跡において新たな知見が得られました。

永きにわたって受け継がれてきた貴重な歴史的遺産は、わたしたち現代に暮らす人間にとっても大切な知識をもたらしてくれます。本書が、郷土豊中の豊かな未来形成のために役立つことを願ってやみません。

調査の実施にあたっては、土地所有者、施工関係者、近隣の住民の皆様にも、深いご理解と多大なご協力を賜りました。また文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が推進できましたことを、ここに厚く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成27年(2015年)3月31日

豊中市教育委員会  
教育長 大源文造

## 例 言

1. 本書は、平成 26 年度国庫補助事業（総額 7,000,000 円、国庫 50%、市費 50%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。また平成 25 年度下半期に国庫補助事業として実施した新免遺跡第 71 次調査と、平成 26 年 1～3 月に実施した確認調査の成果も併せて収録した。
2. 平成 26 年度事業として、平成 26 年 4 月 3 日から平成 27 年 3 月 31 日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会事務局地域教育振興室文化財保護チームが実施した。
4. 本書のうち、第 I・IV 章は陣内高志が、第 II 章を服部聡志が、第 III 章を橘田正徳が執筆した。また、第 V 章は各調査担当者の見解をもとに、浅田尚子が執筆した。  
なお、全体の編集は陣内が行なった。
5. 各挿図に掲載した方位表記のうち、M. N. は磁北、また表記のないものは国土座標系（第 VI 系）に基づく座標北を示す。
6. 挿図・本文中の上色表記の基準は、『新版標準土色帖 2010 年版』に基づく。
7. 挿図に掲載した出土遺物の縮尺は原則 1：3 または 1：4 とする。
8. 各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財の保護に対して深いご理解とご協力をいただきました。併せてここに明記し、深謝いたします。

本書掲載本発掘調査一覧

遺跡名	回数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
新免遺跡	第 71 次	豊中市玉井町 2 丁目 184-5	95.3 m <sup>2</sup>	服部聡志	平成 25 年 11 月 6 日 ～ 12 月 28 日
徳橋遺跡	第 41 次	豊中市服部西町 2 丁目 838-1・2	202 m <sup>2</sup>	橘田正徳	平成 26 年 6 月 16 日 ～ 8 月 11 日
蛭池遺跡	第 10 次	豊中市蛭池中町 2 丁目 58-4	43.4 m <sup>2</sup>	陣内高志	平成 26 年 8 月 25 日 ～ 9 月 22 日

# 目 次

第Ⅰ章 位置と環境	(陣内)
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
第Ⅱ章 新免遺跡第71次調査	(服部)
1. 調査の経緯	5
2. 調査の成果	7
(1) 遺跡の概要	7
(2) 基本層序と遺構面の状況	7
(3) 検出した遺構と遺物	7
3. まとめ	13
第Ⅲ章 穂積遺跡第41次調査	(橘田)
1. 調査の経緯	15
2. 調査の成果	15
(1) 基本層序	15
(2) 検出した遺構と遺物	16
3. まとめ	38
第Ⅳ章 蛭池遺跡第10次調査	(陣内)
1. 調査の経緯	39
2. 調査の成果	39
(1) 遺跡の概要	40
(2) 基本層序	40
(3) 検出した遺構と遺物	40
3. まとめ	44
第Ⅴ章 確認調査の成果	(浅田)
確認調査の概要	47

## 挿図・表目次

### (第I章 位置と環境)

第1図 市内遺跡分布図	2
第2図 調査地点と周辺の地形	4

### (第II章 新免遺跡第71次調査)

第3図 調査範囲図 (1:300)	5
第4図 調査地位置図 (1:5,000)	5
第5図 調査区 平面・断面図 (1:60)	6
第6図 竪穴住居1 断面図及び出土遺物 (1:30・1:4)	8
第7図 土坑1・2 断面図及び出土遺物 (1:30・1:3)	9
第8図 掘立柱建物・柱穴等出土遺物 (1:3)	10
第9図 柱穴・ピット断面図1 (1:30)	11
第10図 柱穴・ピット断面図2 (1:30)	12
第11図 柱穴・ピット断面図3 (1:30)	13

### (第III章 穂積遺跡第41次調査)

第12図 調査範囲図 (1:400)	15
第13図 調査地位置図 (1:5,000)	15
第14図 調査区 平面・断面図 (1:80)	17・18
第15図 SE01 平面・断面図 (1:20)	19
第16図 SE01 出土遺物1 (1・2は1:3、3は1:4)	19
第17図 SE01 出土遺物2 (1:4)	20
第18図 SE02 平面・断面図 (1:20)	21
第19図 SE02 出土遺物 (1～3は1:4、4・5は1:4)	22
第20図 SE03 出土遺物 (1:4)	22
第21図 SE03・04 断面図 (1:20)	22
第22図 SE04 出土遺物 (1・2は1:3、3～6は1:4)	23
第23図 SE05 平面・断面図 (1:20)	24
第24図 SE06 平面・断面図 (1:20)	25
第25図 SE06 出土遺物1 (1:4)	26
第26図 SE06 出土遺物2 (1:4)	27
第27図 SE07 平面・断面図 (1:20)	28
第28図 SE08 出土遺物 (1・2は1:3、3は1:4)	28
第29図 SE08 平面・断面図 (1:20)	29

第30図	SE09 平面・断面図 (1:20)	30
第31図	SE09 出土遺物 (1:3)	30
第32図	SE10 出土遺物 (1:3)	31
第33図	SK01 出土遺物 (1・2は1:3、3は1:4)	31
第34図	SK01 断面図 (1:40)	31
第35図	SK04 断面図 (1:40)	32
第36図	SK04 出土遺物 (1:3)	32
第37図	SD01 平面図 (1:160)	32
第38図	SD01 断面図 (1:40)	33
第39図	SD01 西部遺物出土状況	33
第40図	SD01 中央部遺物出土状況	33
第41図	SD01 出土遺物 (1~10・15・16は1:4、11~14・17は1:3)	34
第42図	SD06 断面図 (1:20)	36
第43図	SD06 出土遺物 (1:3)	36
第44図	SD09 断面図 (1:20)	37
第45図	SD09 出土遺物 (1は1:3、2~6は1:4)	37

#### (第IV章 埴池遺跡第10次調査)

第46図	調査範囲図 (1:200)	39
第47図	調査地位置図 (1:5,000)	39
第48図	調査区(第2面) 平面・断面図 (1:40)	41
第49図	掘立柱建物1 平面・断面図 (1:60)	42
第50図	第2面出土遺物 (1:4)	42
第51図	調査区(第1面) 平面図 (1:40)	43
第52図	遺物包含層 出土遺物 (1:4)	44
第53図	調査区周辺における検出遺構図 (1:400)	45

#### (第V章 確認調査の成果)

第1表	平成26年(2014年)確認調査一覧表	47
第54図	確認調査地点位置図	48
第55図	トレンチ掘削状況	49
第56図	トレンチ断面図	49
第57図	トレンチ掘削状況	49
第58図	トレンチ断面図	49
第59図	トレンチ掘削状況	49
第60図	トレンチ断面図	49
第61図	トレンチ掘削状況	50

第 62 図	トレンチ断面図	50
第 63 図	トレンチ掘削状況	50
第 64 図	トレンチ断面図	50
第 65 図	トレンチ掘削状況	50
第 66 図	トレンチ断面図	50
第 67 図	トレンチ掘削状況	51
第 68 図	トレンチ断面図	51
第 69 図	トレンチ掘削状況	51
第 70 図	トレンチ断面図	51
第 71 図	トレンチ掘削状況	51
第 72 図	トレンチ断面図	51
第 73 図	トレンチ掘削状況	52
第 74 図	トレンチ断面図	52
第 75 図	トレンチ掘削状況	52
第 76 図	トレンチ断面図	52
第 77 図	トレンチ掘削状況	52
第 78 図	トレンチ断面図	52
第 79 図	トレンチ掘削状況	53
第 80 図	トレンチ断面図	53
第 81 図	トレンチ掘削状況	53
第 82 図	トレンチ断面図	53
第 83 図	トレンチ掘削状況	53
第 84 図	トレンチ断面図	53
第 85 図	トレンチ掘削状況	54
第 86 図	トレンチ断面図	54
第 87 図	トレンチ掘削状況	54
第 88 図	トレンチ断面図	54
第 89 図	トレンチ掘削状況	54
第 90 図	トレンチ断面図	54
第 91 図	トレンチ掘削状況	55
第 92 図	トレンチ断面図	55
第 93 図	トレンチ掘削状況	55
第 94 図	トレンチ断面図	55
第 95 図	トレンチ掘削状況	55
第 96 図	トレンチ断面図	55
第 97 図	トレンチ掘削状況	56
第 98 図	トレンチ断面図	56

第 99 図	トレンチ掘削状況	56
第 100 図	トレンチ断面図	56
第 101 図	トレンチ掘削状況	56
第 102 図	トレンチ断面図	56
第 103 図	トレンチ掘削状況	57
第 104 図	トレンチ断面図	57
第 105 図	トレンチ掘削状況	57
第 106 図	トレンチ断面図	57
第 107 図	トレンチ掘削状況	57
第 108 図	トレンチ断面図	57
第 109 図	トレンチ掘削状況	58
第 110 図	トレンチ断面図	58
第 111 図	トレンチ掘削状況	58
第 112 図	トレンチ断面図	58
第 113 図	トレンチ掘削状況	58
第 114 図	トレンチ断面図	58
第 115 図	トレンチ掘削状況	59
第 116 図	トレンチ断面図	59
第 117 図	トレンチ配置図	59
第 118 図	トレンチ断面図	59

## 写真図版目次

### 図版 1 新免遺跡第 71 次調査

- (1) 遺構検出状況（西から）
- (2) 遺構完掘状況（西から）

### 図版 2 新免遺跡第 71 次調査

- (1) 竪穴住居 2（北から）
- (2) 柱穴等断面

### 図版 3 新免遺跡第 71 次調査

- (1) 柱穴・ピット・土坑断面
- (2) 出土遺物

### 図版 4 穂積遺跡第 41 次調査

- (1) 調査区全景（西側）
- (2) SD01 全景

### 図版 5 穂積遺跡第 41 次調査

- (1) 調査区全景（東側）
- (2) SE01

### 図版 6 穂積遺跡第 41 次調査

- (1) SE02
- (2) SE05

図版 7 穂積遺跡第 41 次調査

- (1) SE04 断面
- (2) SE04 井戸枠

図版 8 穂積遺跡第 41 次調査

- (1) SE06 井筒
- (2) SE06 水溜

図版 9 穂積遺跡第 41 次調査

- (1) SE08
- (2) SE09

図版 10 蛭池遺跡第 10 次調査

- (1) 第 1 面 完掘状況 (東から)
- (2) 第 1 面 土坑 1 断面 (南から)

図版 11 蛭池遺跡第 10 次調査

- (1) 第 2 面 遺構検出状況 (東から)
- (2) 第 2 面 遺構完掘状況 (東から)

図版 12 蛭池遺跡第 10 次調査

- (1) 第 2 面 柱穴 1 断面 (東から)
- (2) 第 2 面 柱穴 2 断面 (東から)

図版 13 蛭池遺跡第 10 次調査

- (1) 第 2 面 柱穴 3 断面 (東から)
- (2) 第 2 面 柱穴 3 完掘状況 (北から)

図版 14 蛭池遺跡第 10 次調査

- (1) 第 2 面 柱穴 4 断面 (西から)
- (2) 第 2 面 柱穴 5 断面 (西から)

図版 15 蛭池遺跡第 10 次調査 出土遺物

- (1) 第 2 面 柱穴 4 出土須恵器  
(第 50 図 6)
- (2) 第 2 面 柱穴 18 出土須恵器  
(第 50 図 3)

図版 16 蛭池遺跡第 10 次調査 出土遺物

- (1) 遺物包含層出土遺物  
(第 52 図 1～5)
- (2) 第 2 面 遺構出土遺物  
(第 50 図 1・2・5)
- (3) 遺物包含層出土遺物  
(第 52 図 6)

# 第1章 位置と環境

## 1. 地理的環境

豊中市は大阪市の北方に位置し、西は猪名川を介して兵庫県と接しており、旧国名では摂津国に属する。近世以前は大都市近郊の農村であったが、明治43年箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄宝塚線）開通を契機に宅地化が進み、現在では市域面積約37㎢中に39万人もの人口を擁する北摂最大の住宅都市へと発展した。ここに到った背景としては大阪市近郊であることに加え、名神高速道路や阪神高速道路などの自動車専用道路や、阪急電鉄や北大阪急行、大阪モノレールによる電車網、さらには大阪国際空港に示される交通の利便性の高さが挙げられる。

一方、地形に目を転じると、豊中市は巨視的に見て北から南に向かって標高が徐々に低くなるなだらかな地形を呈しており、市内最高地点である鳥熊山（海拔約100m）から最も低い大島町付近（海拔1m以下）にかけての比高差はおおよそ100mである。ここで地形的特徴に基づくと、おおよそ北部・中部・南部という三地域に区分可能である。北部一帯は千里丘陵と刀根山丘陵と呼ばれる2つの丘陵地からなる。前者の千里丘陵は大阪層群の模式地としてその名が知られている通りである。続いて中部一帯は主に千里丘陵から派生する中・低位段丘を中心とした通称豊中台地に該当し、最後に南部一帯は猪名川水系、天竺川、高川の沖積作用によって形成された平野部という見方ができる。

第2章で報告する新免遺跡は豊中台地北部の低位段丘上、第3章の穂積遺跡は天竺川右岸の沖積地、第4章の蛭池遺跡は千里丘陵南西端部の低位段丘上にそれぞれ立地する。

## 2. 歴史的環境

ここでは、今回報告する3遺跡の動向を中心に記述する。

**新免遺跡** 新免遺跡は弥生時代中期（畿内第Ⅱ様式期）に勝部遺跡の分村として誕生したとみられる。一般に豊中市域における弥生遺跡の動態は弥生時代中期に低地から台地上に進出する傾向がうかがえ、新免遺跡は千里川流域における好例といえる。

同遺跡は弥生時代中期と古墳時代中期～後期にそれぞれ盛期を迎えるが、なかでも弥生時代中期（畿内第Ⅲ～Ⅳ様式期）は最盛期とみられ、多数の竪穴住居と方形周溝墓からなる北摂地域有数の拠点集落が形成される。続いて古墳時代中期後葉～後期前半に迎える盛期には、遺跡中央～北部一帯に展開する居住地とともに、遺跡南部一帯には古墳群（新免古墳群）が形成される。これらの背景として、千里川上流域に展開する桜井谷窯跡群との関連性が考えられ、同遺跡から確認される須恵器不良品を含んだ廃棄土坑・溝の存在は両者の強い関連性を推察させうる。第2章で報告する調査地は遺跡北部に位置し、一帯は弥生時代中期～後期、古墳時代後期の集落関連遺構が多数確認されているエリアである。

**穂積遺跡** 同遺跡の初現は縄文時代中期に遡るが、本格的な集落形成は弥生時代終末期を迎えてからであり、以後古墳時代初頭に至るまでは豊中南部地域における拠点集落として展開するよ



- |             |                |            |              |             |              |
|-------------|----------------|------------|--------------|-------------|--------------|
| 1. 大原塚古墳跡   | 16. 田池北(宮の前)跡跡 | 30. 渡輪渡跡跡  | 44. 南口八雲跡    | 58. 石燈寺高寺   | 72. 小竹屋跡跡    |
| 2. 野洲野村古墳群  | 16. 田池北(宮の前)跡跡 | 31. 渡輪渡跡   | 45. 稲敷跡跡     | 59. 石燈寺高寺   | 73. 上野山古蹟    |
| 3. 野洲跡跡     | 17. 雲津跡跡跡      | 32. 山ノ上道跡  | 46. 稲敷跡跡跡    | 60. 寺内跡跡    | 伊弉諾式所遺跡      |
| 4. 中野野村古墳跡  | 18. 雲津跡跡       | 33. 橋本古蹟跡  | 47. 西川跡跡(北流) | 61. 赤倉北道跡   | 74. 上津山古蹟跡   |
| 5. 少雲跡跡     | 19. 藤江跡跡跡      | 34. 北井跡跡   | 48. 藤江跡跡     | 62. 仁徳跡跡    | 75. 上津山古蹟跡   |
| 6. 武藏遺跡跡跡跡跡 | 20. 東方山古蹟跡     | 35. 河村北道跡  | 49. 藤江跡跡     | 63. 河倉古蹟跡   | 76. 上津山古蹟跡   |
| 7. 坂野寺古蹟跡跡  | 21. 山ノ上跡跡      | 36. 河村北道跡  | 50. 曾根跡跡     | 64. 河倉西道跡   | 77. 藤原スシノ古蹟跡 |
| 8. 栗原下流古蹟跡  | 22. 上野跡跡       | 37. 藤江古蹟跡  | 51. 曾根跡跡跡    | 65. 藤原寺跡跡   | 78. 仁徳跡跡     |
| 9. 持葉山古蹟    | 23. 雲津古蹟       | 38. 雲津北道跡  | 52. 曾根跡跡跡跡   | 66. 藤原寺跡跡   | 79. 仁徳跡跡     |
| 10. 持葉山古蹟   | 24. 藤江古蹟       | 39. 下野跡跡   | 53. 曾根跡跡跡跡   | 67. 藤原寺跡跡   | 80. 仁徳跡跡     |
| 11. 内野跡跡    | 25. 金吾山古蹟      | 40. 長科寺道跡  | 54. 曾根跡跡     | 68. 藤原寺跡跡   | 81. 仁徳跡跡     |
| 12. 内野跡跡    | 26. 長科山古蹟      | 41. 海野古蹟   | 55. 長科跡跡     | 69. 寺内跡跡    |              |
| 13. 北方山古蹟   | 27. 金吾山古蹟      | 42. 藤原寺跡   | 56. 海野跡跡     | 70. 南口大式部跡跡 |              |
| 14. 北方山古蹟   | 28. 本町跡跡       | 43. 大板跡跡跡跡 | 57. 長科跡跡     | 71. 北條跡跡    |              |
|             | 29. 新化跡跡       |            |              |             |              |

第1図 市内遺跡分布図

うである。なかでも弥生時代終末期の集落からは連鋳式の銅鐵未成品が出土するなど一般の集落ではみられない青銅製品の生産集落でもあった。その後、遺跡は古墳時代後期頃に一旦衰退し、飛鳥時代以降は次第に耕地化が進むようである。鎌倉時代になると同遺跡中央部と東端部にそれぞれ小規模な集落が営まれるように再編されていくようである。

今回の調査地は遺跡中央部に位置し、付近では弥生時代終末期の集落の他、古墳時代後期の円墳などを検出している。

**蛭池遺跡** 千甲丘陵西南端部の低位段丘上に立地する蛭池遺跡は、二次的な堆積層出土だが国府型ナイフ形石器の出土が知られており、遺跡の初現は旧石器時代に遡る可能性がある。古墳時代後期～奈良時代には段丘上に掘立柱建物の集落が、浅い谷部分において密集土墳墓が多数営まれるようになる。密集土墳墓群の性格については墓地または粘土探掘坑の2種類の説が存在するものの未だ決着がついていない。中世段階については麻田藩陣屋跡第11次調査によれば、13～14世紀に掘立柱建物および礎石建物からなる集落が成立し、14～15世紀にその集落が廃絶し、麻田藩陣屋の建設以前に一旦耕地化した可能性が考えられている。近世は藩主青木氏による麻田藩陣屋が廃藩置県まで当地に営まれることになる。江戸時代後期とされる本市教育委員会所蔵の陣屋絵図は、各屋敷地の所有者や表・裏の間口の寸法、屋敷境ごとの寸法などが記されており、これと蛭池駅西地区再開発工事に伴う発掘調査で検出された遺構とを照らし合わせることで、各屋敷境が明らかになっている。

以上、蛭池遺跡は近世の麻田藩陣屋跡と範囲が重複するため、通常、近世以降は麻田藩陣屋跡とし、それに先立つ時期の遺構を蛭池遺跡として取り扱う。



第2図 調査地点と周辺の地形

## 第二章 新免遺跡第71次調査

## 1. 調査の経緯

平成25年(2013年)10月7日、豊中市玉井町2丁目184-5における個人住宅建築にともなう発掘届が提出された。同年10月10日、遺跡の存否を確認するため、重機により2カ所のトレンチを調査した結果、いずれのトレンチでも現地表下約20～30cmの深さにおいて、遺物包含層及び柱穴、土坑等の遺構を検出した。建築にあたり表層地盤の改良が予定されていることから、工事による遺跡の消失は免れないと判断し、ただちに施主ならびに建築業者と協議を行った。その結果、平成25年(2013年)11月6日～12月28日、延べ52日の日程を得て本発掘調査を実施することとなった。



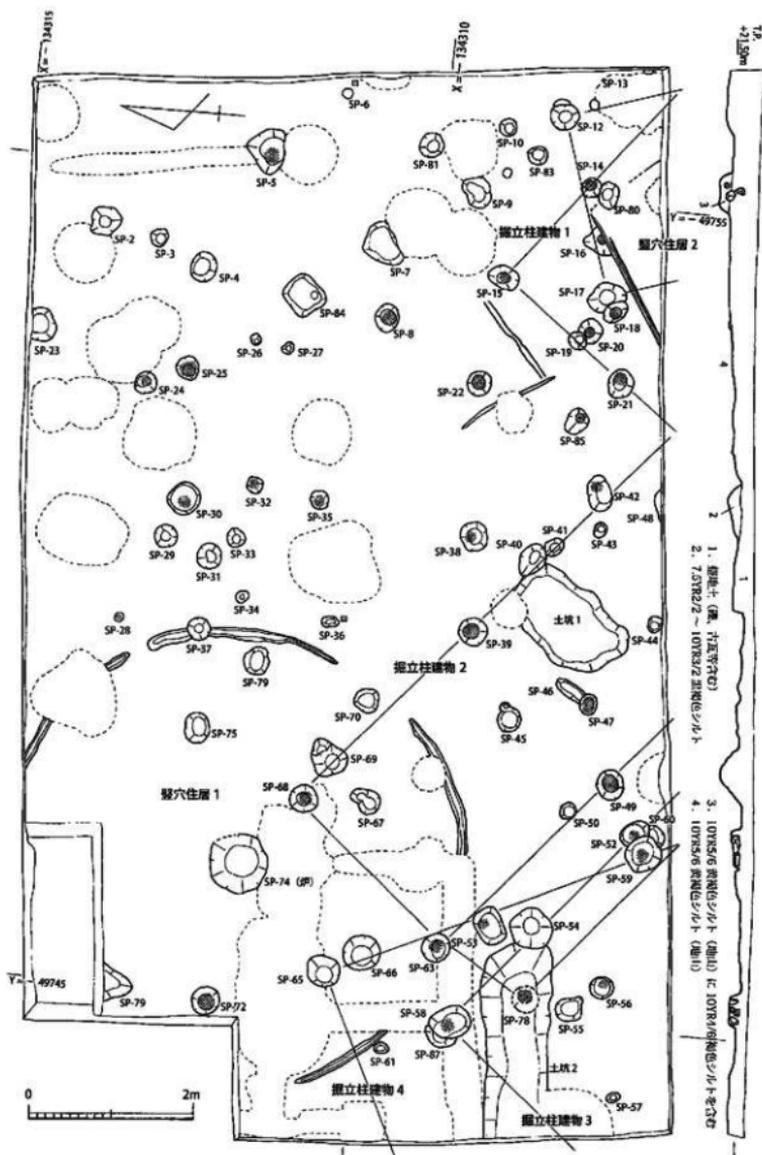
第3図 調査範囲図 (1:300)

なお、同年12月14日(土)には、施主ならびに建築業者の協力のもと、同時に実施していた同遺跡第68～70次調査と合わせ、市民対象の現地説明会を行い、約550人の見学者の参加を得た。



第4図 調査地位位置図 (1:5,000)

2. 調査の成果



第5図 調査区 平面・断面図 (1:60)

## 2. 調査の成果

### (1) 遺跡の概要

新免遺跡は、通称豊中台地の西端部に営まれた、東西 900 m、南北 550 m、面積約 375,000 m<sup>2</sup> を擁する集落遺跡である。縄文早・晩期の石器や土器の出土をはじめ、弥生時代中期～後期前半を盛期とする大規模集落、古墳時代中期集落、須恵器生産を背景に営まれた古墳時代後期集落や古墳群の存在が判明している。今回の調査地点が位置する遺跡北西部は、これまで弥生時代中期の竪穴住居や方形周溝墓、後期後半期の遺構・遺物が比較的濃密に分布する地域として知られており、今回も同様な成果が得られることが期待された。

### (2) 基本層序と遺構面の状況

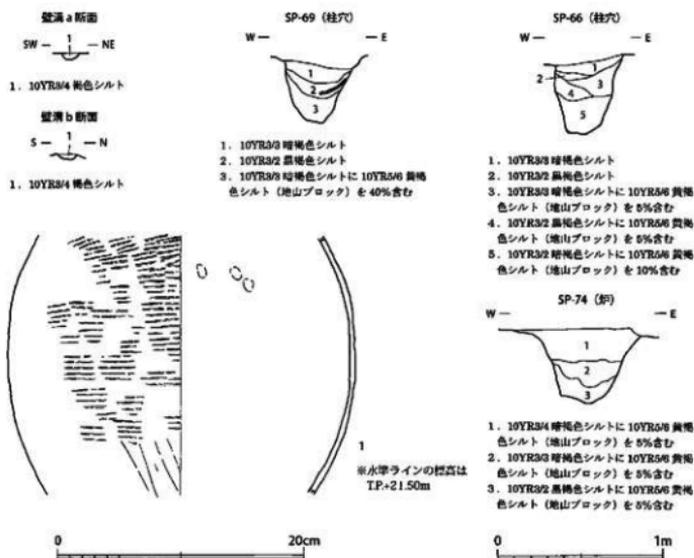
当調査区の基本層序は、表層に近代の瓦片などを含む厚さ 10～20cm の整地層があり、その下には調査区中央部付近に限り、遺物を含む褐色シルト層が薄く存在した。それ以外の場所では整地層の下は、黄褐色粘土～シルトの地山層（段丘層）となり、中・近世の耕作活動や近代以後の宅地造成によりすでに敷地内は大規模に削平を受けているものと推定された。このことは、覆土が全く残存せず、周囲の壁溝も部分的に消失している竪穴住居の残存状況からも窺われた。

以上の点に加えて、遺構面（地山面）は、既存建物に伴う布基礎や束柱礎石の掘り込み、植木の移植穴などにより相当な擾乱を被っていたが、擾乱の程度はいずれも小さく、かつ浅いため、主要遺構の全体像はほぼ確認できたものと思われる。

### (3) 検出した遺構と遺物

**竪穴住居 1** 調査区の北西部において、円形の竪穴住居 1 棟を検出した。削平が著しく、覆土は全く存在しなかった。周囲の壁溝は削平にともなって部分的に消失していたが、かろうじて残った壁厚の幅は 8～16cm、深さは 3cm 未満を計り、住居の規模は直径 5.7 m を計測した。住居内東部付近を中心に残存していた褐色シルトブロックと地山ブロックが混じるやや汚れた土は、貼り床の一部とみられる。住居の中心部から炉穴とみられる直径 70cm、深さ 38cm の大きなピットが検出された。断面はすり鉢状を呈し、埋土はおおむね 3 層に分かれ、上部 2 層は地山ブロックをわずかに含む暗褐色シルト、最下層はそれよりも色調の濃い粘質土を主体としていた。灰穴に通例みられる明確な灰の堆積や、炭化物の混入は顕著ではなく、炉壁にはとくに火熱による影響は認められなかった。柱穴とみられるピットは、炉穴の南西、南東のほぼ等距離の位置に 2 個を検出した（SP-66、69）。直径は 40～50cm、深さ約 40cm で、いずれもしっかりとした掘形をもつが、ともに柱痕は確認できず、埋土は水平堆積もしくは互層状を示していた。掘り直しの痕跡もなく、SP-69 の埋土中位からは大きな甕の破片が水平位に意図的に埋め込まれたような状態で出土した。柱穴とみられ

## 2. 調査の成果



第6図 竪穴住居1 断面図及び出土遺物 (1:30・1:4)

るピットはこの2個を数えるのみであり、数度の精査にもかかわらず、炉穴を挟んだ対称的位置(北側)から柱穴は検出されなかった。2個の柱穴間の距離は2.4mである。

以上のように当住居は、検出した柱穴が2個にとどまること、柱穴埋土の状況に不自然さがみられること、炉穴も被熱の痕跡が認められないなど、通常の竪穴住居と比べると不完全さが目立つ。竪穴住居として未完成に終わった遺構である可能性も考慮しておきたい。

出土遺物として、SP-69から出土した裏体部1点があり、体部径28cm、外面を水平方向のタタキ、下部は縦方向のケズリを施し、内面は板ナデもしくはケズリとみられるが、摩耗が著しく不明。下部にはススの付着が認められる。第IV様式の特徴を有する。

**竪穴住居2** 調査区南東部で検出した住居跡とみられる遺構である。極めて残存状況が悪いため、平面図に示す通りの方形プランの形状であったかどうかは厳密には分からない。北東-南西に走る直線的な小溝は明らかに人為的なもので、住居内部にわずかながら覆土の一部が残存した。溝は幅5cm前後、深さ3cm未満を計るが、SP-14付近で途切れ、ここをコーナーに90度南に折れたところに、かすかな遺構埋土の色の違いが直線状に認められた。時期は不明であるが、方形を基調とする平面プランが想定されるため、弥生時代後期~古墳時代後期のいずれかの時期とみられる。

**竪穴住居と推定されるピット** 今回の調査区内で、40cm以上の深度に達するピットは、上の竪穴住居1の柱穴以外に、調査区南東部のSP-12とSP-17がある。いずれも直径に比して深度が深く、急角度に掘り込まれ、黒褐色もしくは暗褐色のシルトを埋土とし、柱痕が確認されないなど共通点が見られる。また、いずれのピットも埋土に含まれる遺物は弥生土器に限られる。二つのピット間の距離は2.3mで、竪穴住居1の柱穴間距離とほぼ同じであることから、竪穴住居1と同様、弥生

時代中期の住居の柱穴であった可能性が考えられる。

**掘立柱建物の概要** 今回の調査で検出したピットは73個を数え、うち柱痕が確認できたものは28個である。また28個のうち、須恵器が出土した柱穴は12個で、調査区付近に古墳時代後期に属する相当数の掘立柱建物が存在したことが推測される。

これら柱穴の配置を検討したところ、調査区南部に偏在して4棟の建物を復元できた。いずれも桁行方位は北西-南東で、新免遺跡でこれまでに検出された古墳時代後期建物の方位と同様な傾向を示す。ただし柱間のばらつきが大きく、建物全体が判明したものが皆無であるため、いずれも確実なものとはいえない。一応復元できた建物について以下に概要を記す。

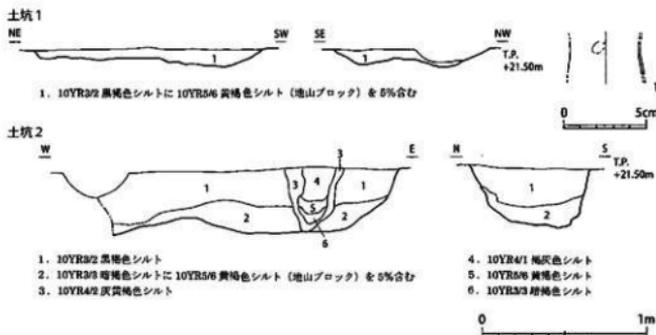
**掘立柱建物1** 調査区南東部で直角に並ぶ3個の柱穴である。直径25～38cm、深さ20～30cmでいずれも柱痕は明瞭である。方位はW-51°30'-N。柱間は長い方が1.5m、短い方が1.5mである。これらの柱穴からは須恵器は出土していない。

**掘立柱建物2** 建物1とほぼ同方位をとる。柱穴は直径35～40cm、深さ30cm前後を計り、すべての柱穴で柱痕が確認できた。柱の直径は10～15cmである。柱間は長い方が2.35～2.9m、短い方が2.5mで、一般的な建物の柱間が2m以内に収まるものが多いのに比べるとかなり長い。梁方向からややずれるが、SP-78などの柱穴を当建物と一体とみれば、南西に面して庇が付く可能性も想定される。SP-63から須恵器が出土している。

**掘立柱建物3** 調査区南西部に並ぶ3個の柱穴で、直径40～50cm、いずれも深さ30cm以上の深いピットである。建物1、2とほぼ同方位をとる。2個の柱穴で柱痕が確認されている。柱間は1.6～1.7mで、通有の規模である。3個の柱穴のいずれからも須恵器が出土している。

**掘立柱建物4** 調査区南西部に並ぶ3個の柱穴である。柱穴は直径約40cm、深さ20cm前後を計り、2個の柱穴で柱痕が確認できた。この柱穴列のみ方位が大きく異なり、W-27°10'-Nを計測する。柱間は2.0～2.1mで、いずれの柱穴からも須恵器が出土している。

**土坑1** 調査区南側の中央部で検出した不定横円形の土坑で、長径1.5m、短径0.93m、深さ6



第7図 土坑1・2 断面図及び出土遺物(1:30・1:3)

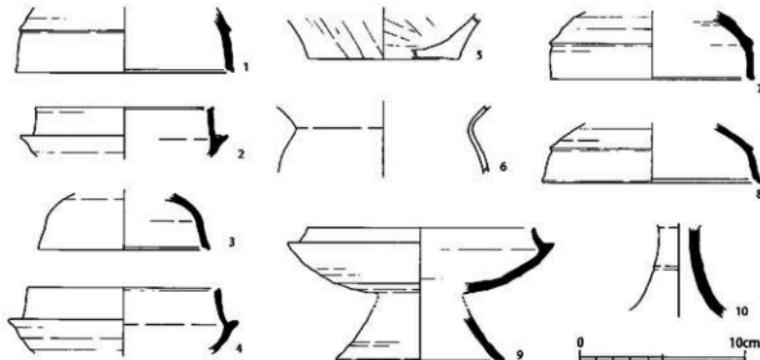
## 2. 調査の成果

cmを計る。残存深度が浅く、埋土は黒褐色シルト1層のみである。出土遺物として製塩土器の細片若干がある(第7図)。カップ形を呈する小型薄手のもので、5世紀後半～6世紀前半に通常の形式である。当遺構の性格は判然としませんが、長軸・短軸方位が掘立柱建物2と共通し、建物の想定範囲内におさまる点から、建物2に関連する遺構であった可能性も考えられる。

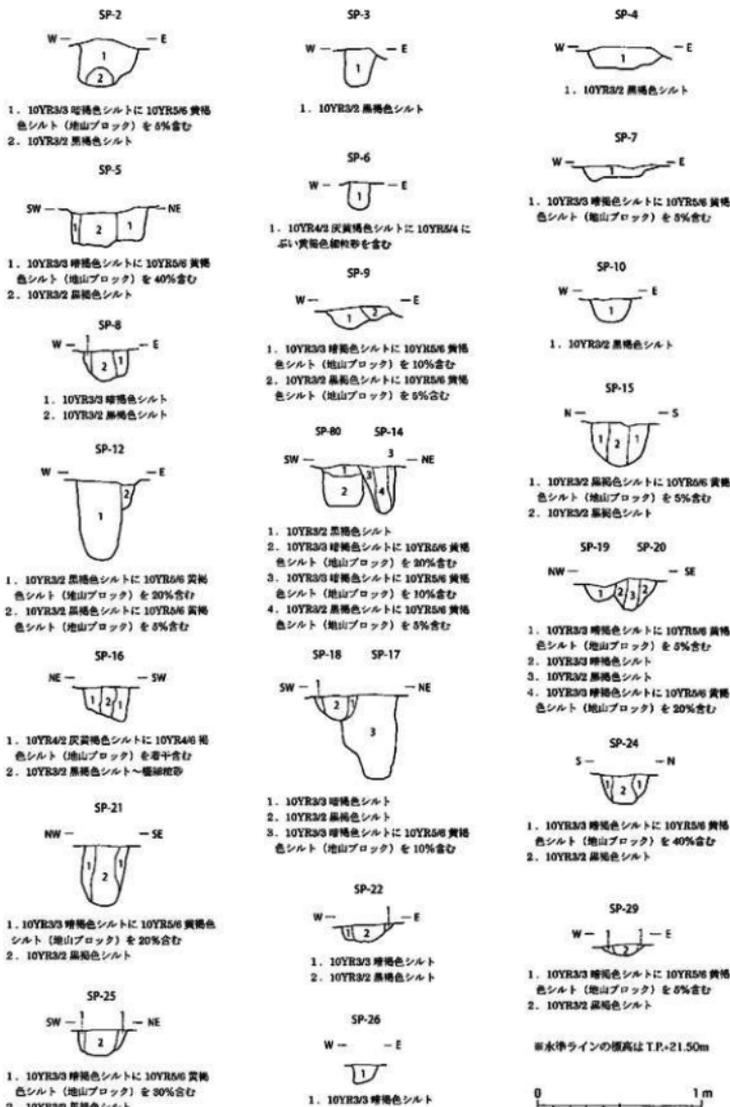
十坑2 竪穴住居1の南側で検出したもので、南北の幅0.9m、東西の長さ2.1m以上、深さ40cmを計る。埋土は概ね2層に分かれ、上層は黒褐色シルト、下層は暗褐色シルトである。南北の幅が一定し、しかも長方形に近い形状から、当初土壌墓などの可能性を想定した。しかし、地山の掘形と埋土の土質の変化は漸移的で明瞭でなく、遺物もほとんど見られないなど、弥生時代以降の遺構とも様相を異にする。建物2の柱穴(SP-78)との重複が確認されることから、古墳時代後期より以前の遺構である可能性が高い。正確な時期、性格はともに判然としえないものである。

柱穴・ピット出土遺物(第8図) 1～3は掘立柱建物3の柱穴とみられるSP-58から出土した。

1は蓋杯の蓋で、推定口径13.3cm、残存高4.2cmを計る。口縁部は高く、傾斜も急で、端部内面の段は明瞭である。2は蓋杯で、口径10.8cm、残存高3.2cm。口縁部の立ち上がりは高く、かつ傾斜も急で、端部内面の段はシャープにつくられる。受部は斜め上方に長く鋭利に突出し、体部のケズリの範囲も広い。3は短頸壺の蓋で、口径10.2cm、残存高3.4cm。丸い天井部からハ字状に開く口縁部を有し、口縁端部内面の段は明瞭である。とくに杯・蓋の形態から、概ね6世紀初頭に比定できる。4はSP-52・59から出土した蓋杯で、口径11.6cm、残存高4.1cm。口縁部の立ち上がりは高く、かつ傾斜も急で、端部内面の段はやや丸みを帯びる。口径から、上の1、2と同時期かやや後出するものと判断される。掘立柱建物3、4のいずれかの時期を示す。5はSP-10から出土した弥生時代中期の甕底部である。底径9.1cmで、外面はケズリ、内面は斜め方向のケズリもしくは板ナデの痕跡を残す。6はSP-24から出土した土師器の甕である。磨滅により調整は不明。器形から6世紀の所産とみられる。7～10は遺構面精査時に出土した。7、8の杯蓋は、口径や口縁端部の特徴から、1、2、4とほぼ同時期とみられる。9は有蓋高杯の杯部と脚部で、直接接合しないが、胎上、色調、調整、脚部径などから同一個体と判断した。口径13.5cm、杯部高3.8cm、

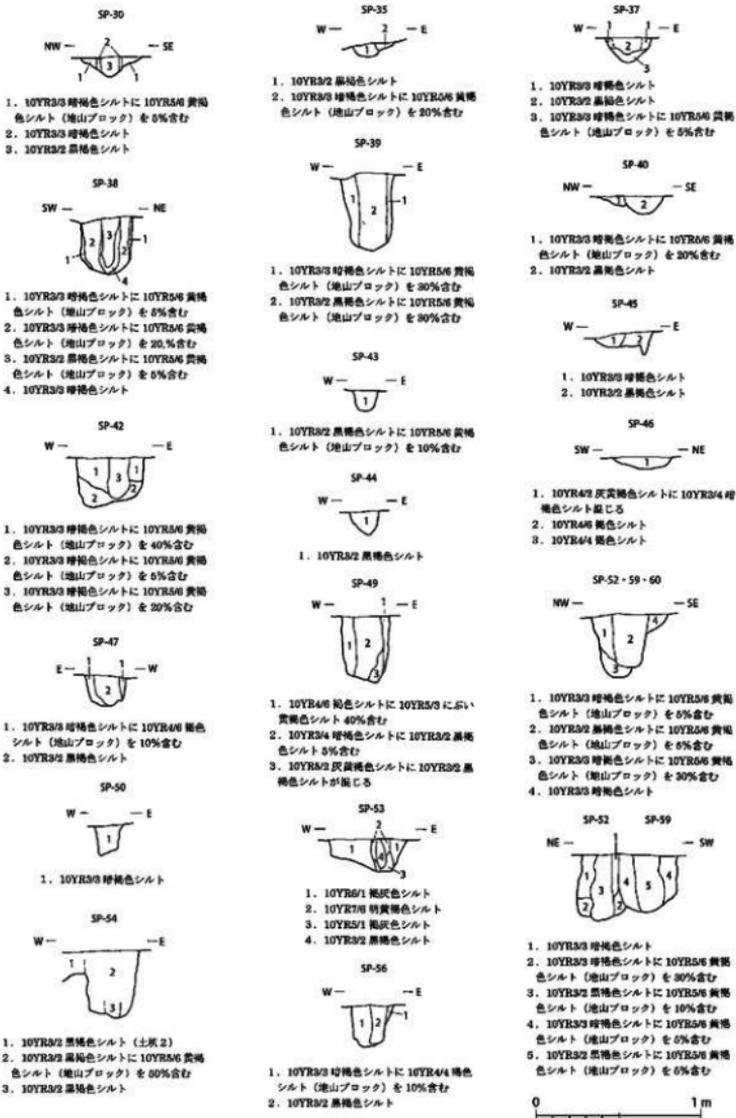


第8図 掘立柱建物・柱穴等出土遺物(1:3)

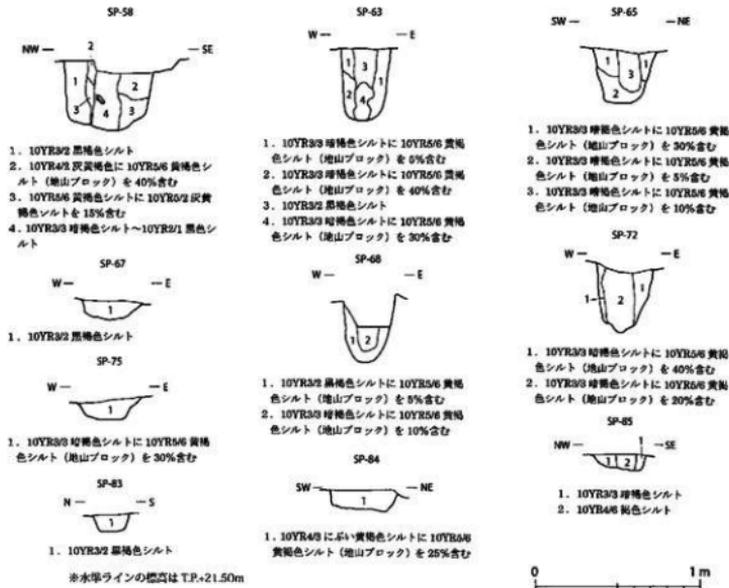


第9図 柱穴・ビット断面図1 (1:30)

3. まとめ



第10図 柱穴・ピット断面図2 (1:30)



第11図 柱穴・ピット断面図3（1：30）

底径10.1cm、脚部高4.2cmを計る。口径や口縁部、体部の形態から上記資料より明らかに後出のもので、6世紀後半の所産とみられる。10は高杯の脚部で、残存高5.3cm、外面中位に鈍い凹線が入る。透かし孔を伴わない長脚二段の無蓋高杯の可能性が高い。9と並行か、もしくは後出のものとして判断される。

### 3. まとめ

新免遺跡のエリアの中でも、遺跡北西部は従前より遺構密度が高い地域とみられてきた。今回の調査地点も例外でなく、上部が削平されていたにもかかわらず、遺構の残りは比較的良好で、竪穴住居をはじめ、掘立柱建物4棟、多数の柱穴を確認できた。竪穴住居は出土した土器から弥生時代中期末（第IV様式）の所産とみられ、当遺跡の弥生集落が最大化する時期に営まれた遺構の一つであることが判明した。ただし、柱穴の配置など遺構としての不完全さも指摘されるため、未完成の遺構である可能性も残している。

また、掘立柱建物をはじめ柱穴の多くは、出土した須恵器から6世紀初頭～前半の所産とみられる。その密度から当該期に盛期を迎える古墳時代後期集落としての様相があらためて確認できた。さらに、同時期とみられる土坑から微量ではあるが製塩土器が出土したことが注目される。同様なものは5世紀後半以降、利倉河、上津島、島田など南部の沿岸部に近い各遺跡を中心に出土している。一方、

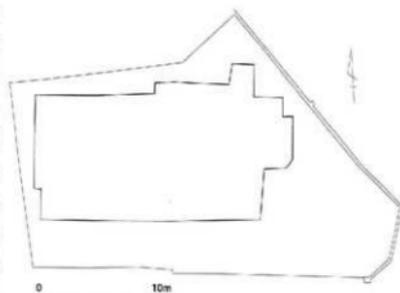
### 3. まとめ

内陸部でも6世紀の須恵器と共伴する事例として新免、山ノ上などの出土例がある。市域の沿岸部、内陸部双方での出土数量の比較から、塩の流通のあり方を追求する上での好資料を提供したものでいえる。

## 第Ⅲ章 穂積遺跡第41次調査

### 1. 調査の経緯

平成26年(2014年)5月1日に、豊中市服部西町2丁目838-1・2において共同住宅の建築にかかる発掘届が提出された。これを受けて、同年5月1日に確認調査を実施した結果、現状地表下1.3mのところまで遺構面を確認し、その上面において土坑等の遺構を検出した。一方、今回の建築計画では現地地表下2.2mまで地盤改良を行い、さらに独立基礎の掘削深度も1.55mに到ることから、遺跡の損壊は免れないことが判明した。このことから、事業者と遺跡の保存について協議を行ったものの、設計の変更は不可能であり、やむなく記録保存のために建築範囲を対象に、平成26年(2014年)6月16日から8月11日までの期間で発掘調査を実施することになった。



第12図 調査範囲図 (1:400)

### 2. 調査の成果

#### (1) 基本層序

当調査地における基本層序は概ね3層に大別できる。現地地表から整地上、暗オリーブ色系の耕作土、そして極めて柔弱で多量の地下水を包含する灰色中粒砂層の順で堆積する。このうち、遺構面



第13図 調査地位置図 (1:5,000)

## 2. 調査の成果

が展開するのは、耕作土直下で検出した灰色中粒砂層の上面で、標高 2.2 m 前後をはかる。穂積遺跡中央部における一般的な基本層序の特徴は、占墳時代以降の著しい水成層の堆積にあり、各時代の遺構はそれぞれ水成層の上面で検出される。また、最終遺構面となる弥生時代終末期の遺構面は標高 1.5 m 前後のところを展開している。しかし、当調査区ではそれよりも 1 m 近く高く、しかも中世後期の遺構と共に検出している。このことは当調査区の一帯が弥生時代終末期以前から形成した微高地にあって、その後大規模な地形の変化もなく近現代まで継続したことを意味している。

当調査区は字「少路」に展開する集落内に位置するが、この集落は集村の形態を呈する。そして、集落が 13 世紀後半には形成していることが、すでに当集落内で行われた確認調査によって確かめられている。この集落は集村化に伴って、以前から形成していた微高地を集落の立地に選定したと言える。

### (2) 検出した遺構と遺物

SE01 調査区西端で検出した井戸で、西半分は調査区外に広がる。このため、東西長は明確ではないが、南北 1.95 m をはかる。深さも、湧水が激しく、井戸最下部まで掘削できなかったため不明であるが、1.0 m 以上になることは確実である。縦板に棧を渡す構造の 1 辺 0.6 m 前後をはかる蒸籠組の井戸枠の内側に、さらに少なくとも 5 個体以上の割れた瓦質土器羽釜を組み合わせた井筒を設置し、その内側に底板を外した桶を 2 段重ねた水溜を設置する。井筒の北側は残存していないが、水溜内からは大型の瓦質土器羽釜の大型片が出土していることから、廃絶時までに崩壊したと考えられる。なお、井筒の直径は 0.45 m で、高さを 0.2 m 前後をはかる。水溜上段は直径 0.3 m、高さ 0.37 m の桶を転用し、下段にも直径 0.2 m（高さ不明）の桶を転用する。

井戸枠と井筒の隙間の一部に、10～15 cm 程度の河原石が充填されていた。また西端からは、土師器小皿が正位置の状態ですべて出土しており、井戸祭祀等との関連が想定できる。

SE01 から出土した遺物は、第 16・17 図に挙げた。

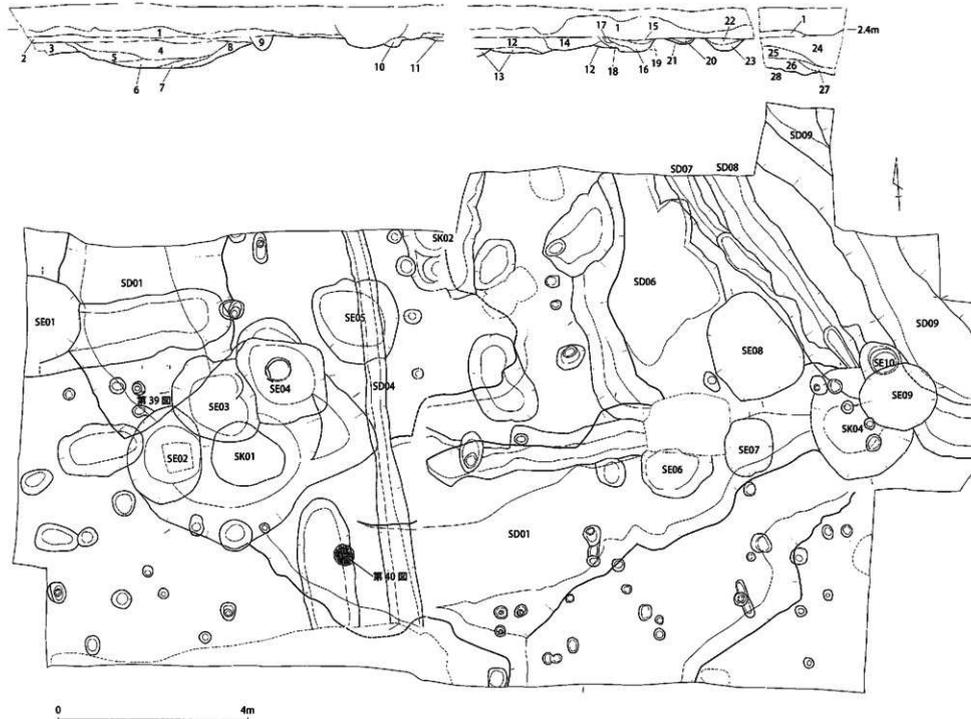
1 は和泉型瓦器碗である。口径は 11.4 cm に復元され、残存高は 2.5 cm をはかる。見込みには連結輪状の暗文が施される。口縁部内外面には横ナデを施すが、体部外面には押圧痕が残る。IV-3 期前後の所産であろう。

2 は土師器小皿である。口径 8.4 cm、器高 1.9 cm をはかる。口縁部内外面には横ナデを、底部内面には一定方向のナデを施すが、体部外面には押圧痕が残る。口縁部外面に 1 条の凹線が認められるが、意図的に施したものか、判断としない。

3～7 は、井戸枠材に使われていた瓦質土器羽釜である。

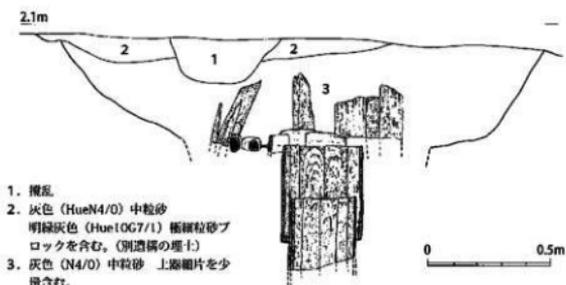
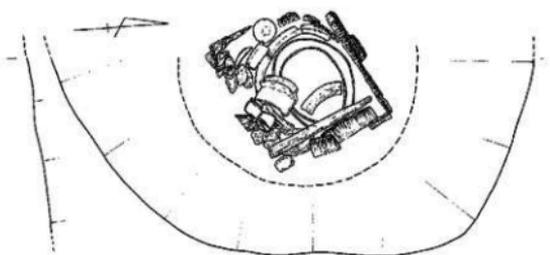
3 の口径は 28.4 cm、鈎径は 33.8 cm に復元され、残存高は 15 cm をはかる。口縁部内面から鈎直下付近まで横ナデを、体部内面には板ナデを施すが、体部外面には成型時の押圧痕が残る。押圧痕から、粘土の巻き上げ方向がわかる。

4 は口径 31.8 cm、鈎径 40.2 cm に復元され、残存高は 14.0 cm をはかる。口縁部外面には強い横ナデで 2 段の段差を設けている。口縁部内面から鈎部には横ナデを、鈎の下部から体部はヘラケズリを施す。胎土が乾燥した後にヘラケズリを行ったのか、器面における砂粒の移動は乏しく、光沢がある。口縁部内面は横方向のハケを、体部内面には斜め方向のハケを施す。

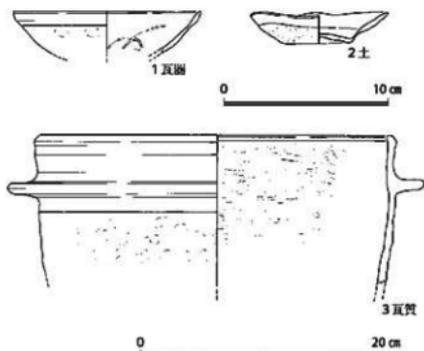


1. 耕作土
2. 灰オリーブ色 (Hue5Y5/2) 中～細粒砂 礫を含む。
3. 灰色 (HueN4/0) 中～粗粒砂 土器破片を含む。
4. オリーブ黒色 (Hue5Y3/1) 中粒砂 土器破片を極少量含む。
5. オリーブ黒色 (Hue5Y3/2) 中粒砂・細粒砂のラミナ
6. オリーブ黒色 (Hue5Y3/2) 中粒砂～細粒砂のラミナ
7. オリーブ黒色 (Hue5Y3/2) 細粒砂～中粒砂のラミナ
8. オリーブ黒色 (Hue5Y3/2) 細粒砂のラミナ
9. 灰色 (Hue5Y4/1) 中粒砂
10. 灰色 (Hue5Y5/1) 中～細粒砂
11. 灰色 (Hue5Y5/1) →暗灰色 (HueN3/0) 細粒砂
12. オリーブ黒色 (Hue10Y3/2) 中粒砂 土器破片を極少量含む。
13. 暗緑灰色 (Hue5G3.5/1) 中粒砂 褐色細粒砂を層状に含む。
14. オリーブ黒色 (Hue10Y3/1) 土器破片を極少量含む。
15. 灰色 (Hue10Y5/1) 細～中粒砂
16. 暗緑灰色 (Hue10GY4/1) 細粒砂 土器破片を含む。
17. 暗緑灰色 (Hue10GY4/1) シルト～極細粒砂
18. 暗オリーブ灰色 (Hue2.5GY4/1) 中粒砂
19. 灰色 (Hue10Y4/1) 中粒砂 土器破片を極少量含む。
20. 灰オリーブ色 (Hue7.5Y6/2) 極細～細粒砂 土器破片を極少量含む。
21. オリーブ灰色 (Hue10Y5/2) 細～中粒砂
22. 緑灰色 (Hue10GY5/1) 極細～細粒砂 土器破片を極少量含む。
23. 灰色 (Hue10Y4/1) 中～細粒砂 土器破片を極少量含む。
24. 灰色 (HueN4/0) 細～極細粒砂
25. 灰色 (HueN5/0) 細～中粒砂
26. 灰色 (HueN4/0) 中粒砂 暗灰色 (HueN3/0～1.5/0) シルトブロックを含む。
27. 明灰色 (Hue10BG7/1) 中粒砂に、黄灰色 (Hue10BC5/1) →暗灰色 (HueN3/0) の塊状ブロックを含む。
28. 灰色 (Hue2.5GY4/1) 中粒砂 (珪質層)

第14図 調査区 平面・断面図 (1:80)



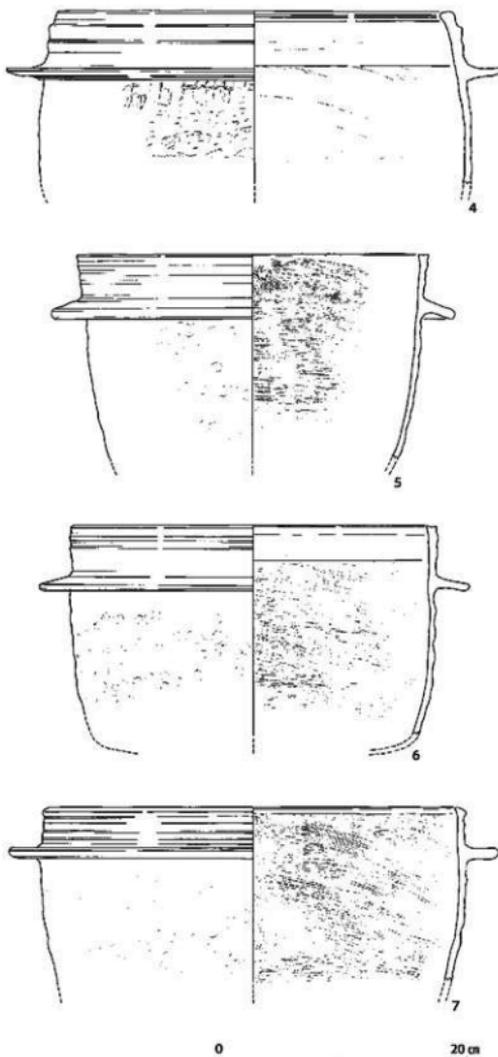
第15図 SE01 平面・断面図 (1:20)



第16図 SE01 出土遺物1 (1・2は1:3、3は1:4)

5の口径は28.4 cm、銜径は32.6 cmに復元され、残存高は16.7 cmをはかる。口縁部外面には強いナデによって、2条の凹線が施される。口縁部内面には斜め方向のハケを、体部内面のうち上半部には横方向のハケを、下半部には斜め方向のハケを施すが、体部外面には押圧痕が残る。

6の口径は29.6 cm、銜径34.8 cmに復元され、残存高は18.5 cmをはかる。口縁部外面には強い横ナデにより凹線が巡るものの、明瞭とは言いがたい。体部内面に斜め方向のハケを施すが、外面は成



第17図 SE01 出土遺物2 (1:4)

型時の押圧痕が残る。

7の口径は33.0cm、鐳径は39.6cmに復元され、残存高は14.0cmをはかる。口縁部外面には強い横ナデにより、2条の凹線が施されるが、あまり明瞭ではない。体部内面には斜め方向のハケを施すが、体部外面には成型時の押圧痕が残る。

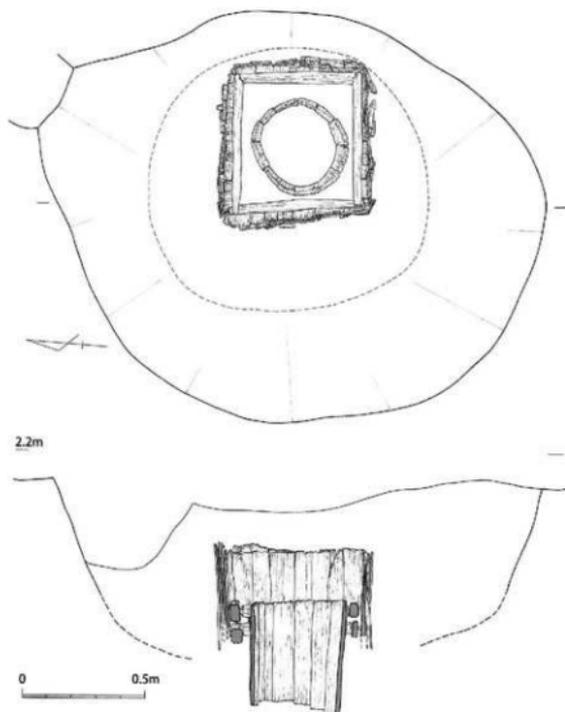
これらの羽釜は井戸杵材であることから、一括性は高い。しかし、その口縁形態が多様であることは注意を要する。

出土した瓦器碗から、14世紀前半頃の所産となる可能性が高い。

SE02 調査区西部で検出した井戸で、SK01・SE03と重複する。長軸長2.2m、短軸長1.65m、深さ0.9m以上をはかる。縦板に2段の棧を渡した蒸籠組の井戸杵に、桶を転用した水溜を設置する。井戸杵に用いられた板材に規格性はなく、棧も建築材等の転用と考えられる。なお、棧は、ほぞで固定する方法を採用している。井戸杵は1辺0.5～0.6m、残存高0.45mで、水溜は直径0.4m、深さ0.55m程度をはかる。

SE02からは、第19図の遺物が出土した。これらの遺物は、井戸廃絶後の堆積土から出土したものである。

1・2は、和泉型瓦器碗である。1の口径は11.8cmに復元され、残存高は2.4cmをはかる。内面には粗雑なヘラミガキ



第18図 SE02 平面・断面図(1:20)

が、口縁部外面にかけては横ナデを施すが、体部外面には押圧痕が残る。2の口径は10.6cmに復元され、残存高は2.6cmをはかる。見込みには平行線状暗文が、口縁部には横ナデを施すが、体部外面には押圧痕が残る。

3は土師器大皿である。口径は10.8cmに復元され、残存高は2.1cmをはかる。実際の器高も、残存高と大差ないと言える。内面から口縁部外面にかけては横ナデを施すが、体部外面には押圧痕が残る。

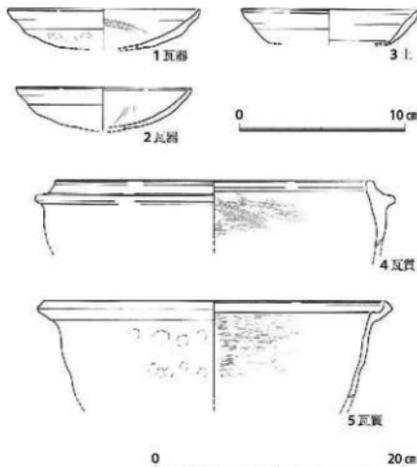
4は、瓦質土器羽釜である。口径25.6cm、鈿形29.0cmに復元され、残存高は5.5cmをはかる。内面には横方向の板ナデを、外面には横ナデを施す。

5は、瓦質土器鍋である。口径は27.6cmに復元され、残存高は7.8cmをはかる。体部内面には板ナデを、口縁部には横ナデを施すが、体部外面には押圧痕が残る。

SE03 調査区西側で検出した井戸で、SK01・SE04と重複する。長軸長2.0m、短軸長1.65m以上、深さ0.4m程度をはかる。井戸枠や水溜は検出されなかったが、上層断面や基盤層の状況から、枠材は廃絶時に回収された可能性が高い。

SE03からは、第20図の遺物が出土した。

2. 調査の成果

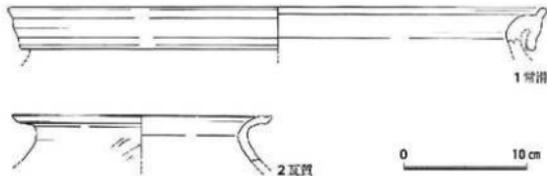


第19図 SE02 出土遺物 (1～3は1:4、4・5は1:4)

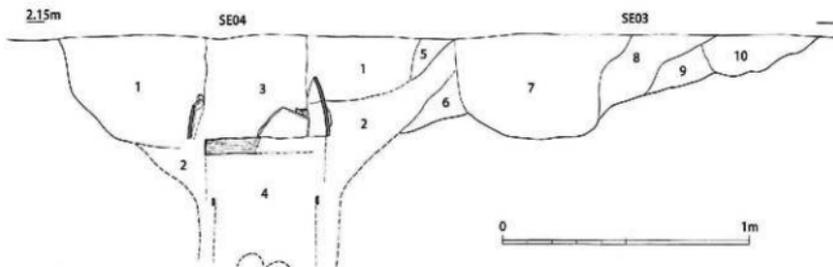
1は常滑焼大甕である。口径は43.2 cmに復元され、残存高は3.4 cmをはかる。口縁部は上下を拡張し、側帯を形成する。口縁部内外面に、横ナデを施す。14世紀前半頃の所産と言える。

2は瓦質土器甕である。口径は21.2 cmに復元され、残存高は3.8 cmをはかる。口頸部内外面に横ナデを施すが、頸部外面にはタタキ痕が残る。

SE04 SE03の東側で検出した井戸である。南北長1.8 m前後、東西長1.6 m以上をはかる。井戸下層は湧水の流入が著しく、水溜等については把握できなかったが、深さは1 m程度になると推定される。井戸枠に陶製土管

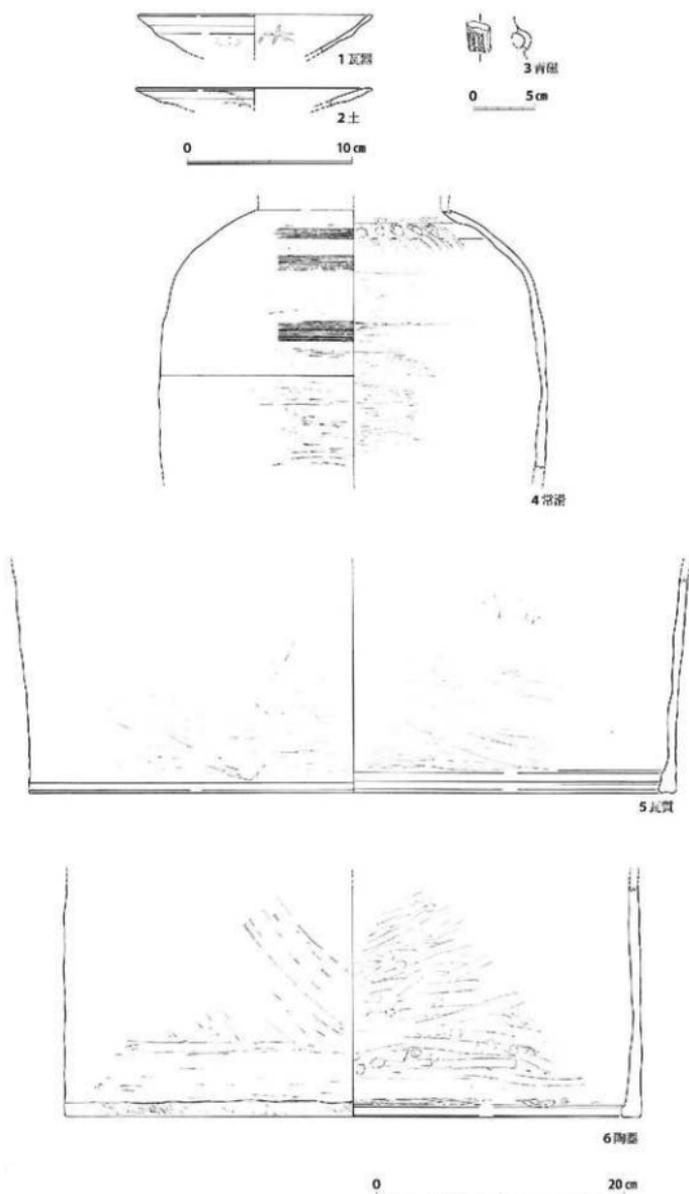


第20図 SE03 出土遺物 1 (1:4)



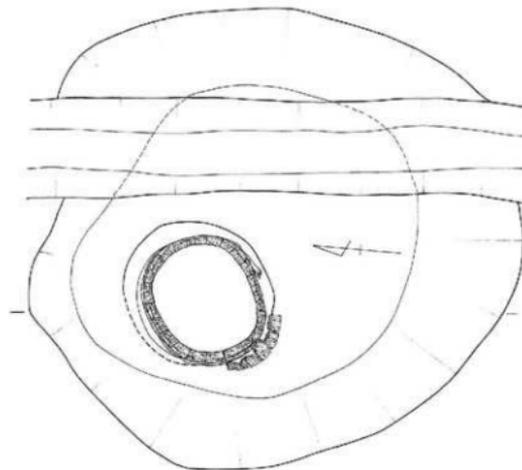
1. 灰色 (Hue2.56.5/1) 中粒砂 土層・瓦片を含む。
2. 湧水により崩壊。
3. 灰色 (HueN6/0～5/0) 層～中粒砂 土器細片・黄色粘土 (Hue5Y7/6) 等のブロックを極少量含む。
4. 灰色 (Hue5Y4/1) 粗層～中粒砂 同色粘土～シルトブロックを含む。
5. 淡黄色 (Hue5Y8/3) 中粒砂 灰白色粘土ブロックを含む。
6. 灰色 (HueN4/0) 層～中粒砂 河原石大の灰白色粘土ブロックを少量含む。
7. 灰色 (Hue5Y5/1～N5/0) 層～中粒砂 同色粘土～シルトブロックを含む。
8. 灰色 (Hue5/1) 層～中粒砂
9. 灰白色 (Hue5Y7/1) 均質な中粒砂 (基礎層の2次堆積)
10. 灰色 (HueN5/0) シルトブロック (Hue5Y5/1～6/1 灰色等) に中粒砂を極少量含む。

第21図 SE03・04 断面図 (1:20)



第22図 SE04 出土遺物 (1・2は1:3、3~6は1:4)

## 2. 調査の成果

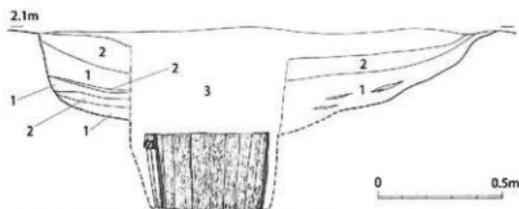


を用い、水溜の上段には曲物の転用品を差える。水溜の下段からは桶枠を固定する竹の組紐が出土しており、桶の転用品を用いたことが判明している。ただし、桶枠自体は回収されたためか、残っていないかった。

SE04からは、第22図の遺物が出土した。このうち、第22図5・6は、井戸内から出土した井戸枠材で、第22図1～4はそれ以外の遺物である。

1は和泉型瓦器碗である。口径は14.0 cmに復元され、残存高は2.3 cmをはかる。内面には粗雑なミガキを、見込みには平行線状暗文を施す。口縁部内外面に横ナデを施すが、体部外面には押圧痕が残る。IV期以降の所産である。

2は土師器人皿である。口径は14.2 cmに復元されるが、残存部が少なく、復元値には疑問が残る。残存高は1.1 cm



1. 灰色 (Hue 7.5Y5/1) 細～極細粒砂 中粒砂を極少量含む。
2. 浅黄色 (Hue 5Y7/3) 中粒砂 (高松野の2次堆積)
3. 湧水により腐蝕。

第23図 SE05 平面・断面図 (1:20)

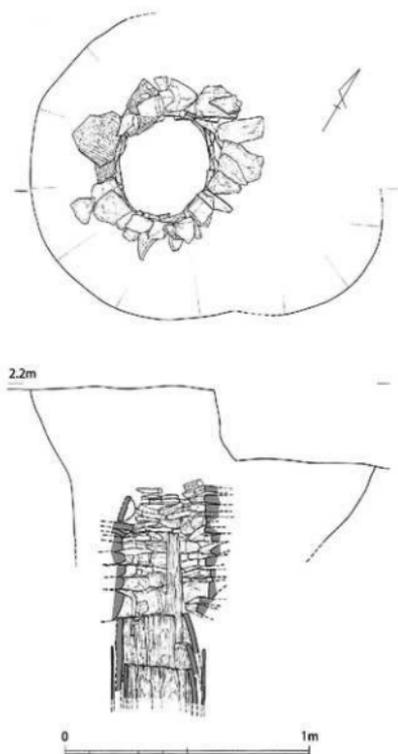
をはかる。口縁部内外面に横ナデを施すが、体部外面には押圧痕が残る。また、口縁端部外面にも、押圧痕が残る。

3は青磁小型四耳壺の把手である。残存部が少なく、傾き等は確定できない。外面には、型出し成形による3条の突帯が施される。

4は常滑焼三筋壺である。頸部径は15.4 cmに復元され、残存高は21.5 cmをはかる。体部上半には、3条の櫛書文が施文される。体部外面のうち、上半部はヘラケズリのあとにナデ(板ナデ?)を、下半部にはヘラケズリを施すが、回転ヘラケズリ・手持ちのいずれかは判然としない。内面のうち、体部には板ナデを施すが、頸部付近には成型時の押圧痕が残る。

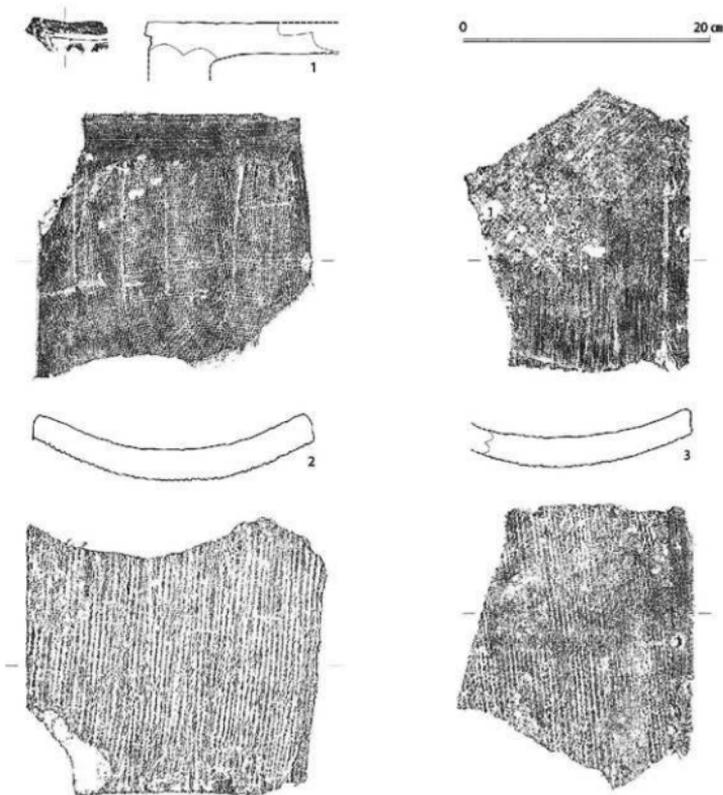
5・6は井戸枠材用の土管で5は瓦質製、6は陶製である。5の口径は52.0 cmに復元され、残存高は17.5 cmをはかる。内外面に板ナデを施す。6の口径は46.4 cmに復元され、残存高は18.5 cmをはかる。内外面に板ナデを施す。5と6は焼成以外の特徵に、大きな違いはみられない。

ところで、水溜最下層付近から第22図4の常滑焼三筋壺や人頭人の河原石が出土したが、湧水の



第24図 SE06 平面・断面図 (1:20)

2. 調査の成果

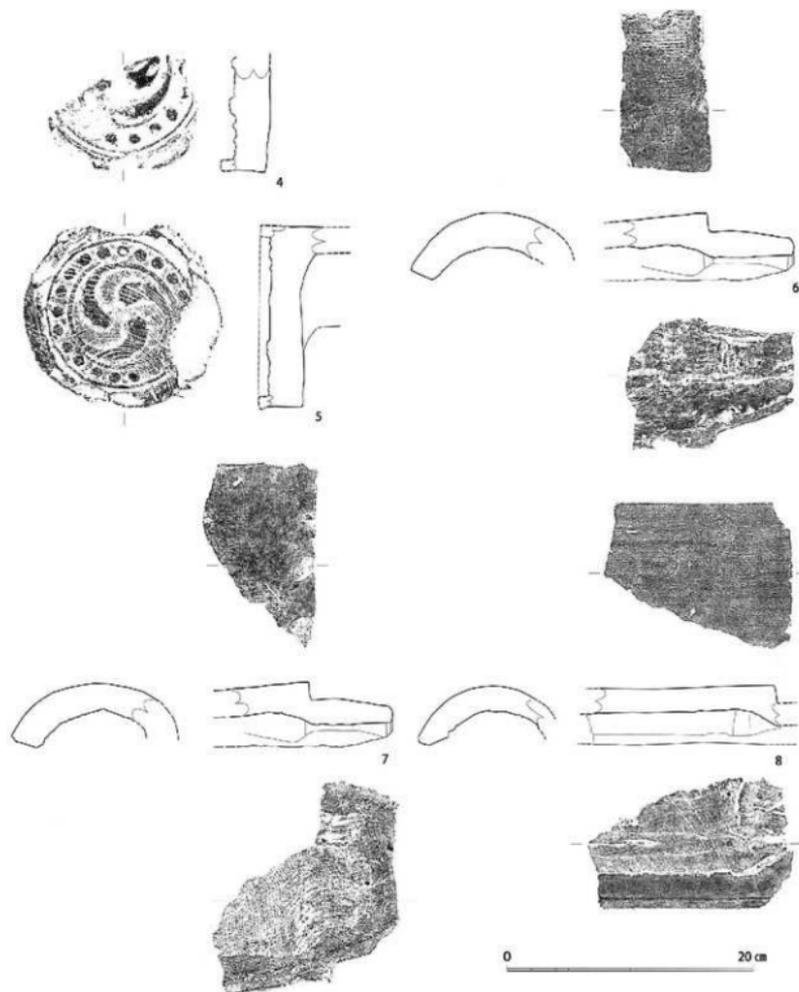


第 25 図 SE06 出土遺物 1 (1:4)

中を手探りで採取したため、これらが石敷き等の井戸構造の一部を構成するものか、廃絶時に投棄されたものなのかは明確ではない。

SE05 調査区中央付近で検出した。直径 2.0 m、深さ 0.7 m をはかる。掘形の西側寄りに桶を転用した水溜を据え、その上部は板材を立てて井戸枠とする。ただし、大半の井戸枠材は埋め戻し時に回収されたのか、ほとんど残っていない。水溜は直径 0.5 m、深さ 0.3 m をはかる。井戸廻形の埋土は、基盤層が流出して再堆積したものである。

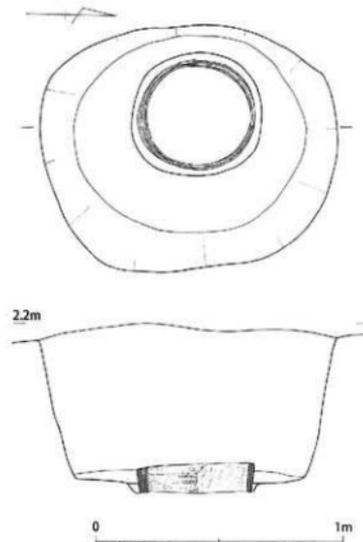
SE06 調査区東よりで検出した瓦組の井戸である。上面は確認調査時の掘乱により削平されているが、長軸長 1.5 m、短軸長 1.0 m 以上、深さ 1.35 m 以上をはかる。井戸枠は、河原石と瓦を不規則に積み重ねる構造である。補強のためか、水溜材の隙間に板材を差し込むようにして立てている。井戸枠の内径は 0.4 m 前後、検出面から深さ 0.55 m をはかる。水溜は外側に直径 0.45 m 程度の曲物を底板を取り外して設置し、さらにその内側に桶を転用した水溜を据える。水溜の上段は、平瓦と同



第26図 SE06 出土遺物2 (1:4)

じょうに湾曲した幅15cm前後の板材と平瓦を立てるようにして据える。なお、井戸枠に使用された瓦は、平瓦と丸瓦の両方があり、特に選別して用いられたとは考えにくい。

SE06の井戸枠には、多量の瓦が転用されていた。このうち、主だったものを第25・26図に掲載したが、軒瓦は掲載したものの以外に出土していない。1は軒平瓦で、瓦当のほとんどは欠損しているが、唐草文の宝珠部分だけが残存している。上面には布目痕が、下面には縄目痕が残る。2・3は平

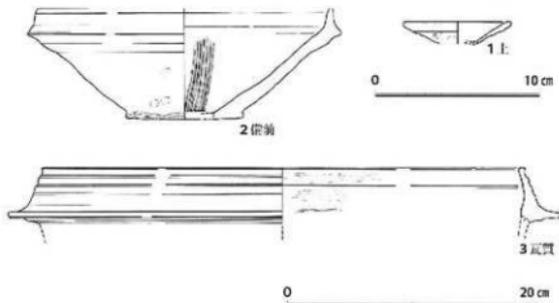


第27図 SE07 平面・断面図 (1:20)

埋没したと言える。

SE07 調査区東部で検出した井戸である。長軸長 1.2 m、短軸長 1.0 m、深さ 1.67 mをはかる。井戸枠はなく、基底面に直径 0.45 cm、高さ 0.12 mの曲物を転用した水溜を設置する。水溜は非常に浅いことや、基盤層が非常に脆いことをふまえると、井戸枠はもともとなかったのではなく、廃絶時に撤去された可能性が高い。

SE08A～C 調査区東部で検出した、2基以上の井戸からなるが、土層断面以外にそれぞれの井戸の規模を知る手がかりは乏しい。SE08A→B→Cの順で掘削される。ただし、Cが井戸として機能したか、疑問を残す。08Aは直径 1.1 m以上、深さ 0.9 mをはかる。基底面上に、直径 0.25 m、深

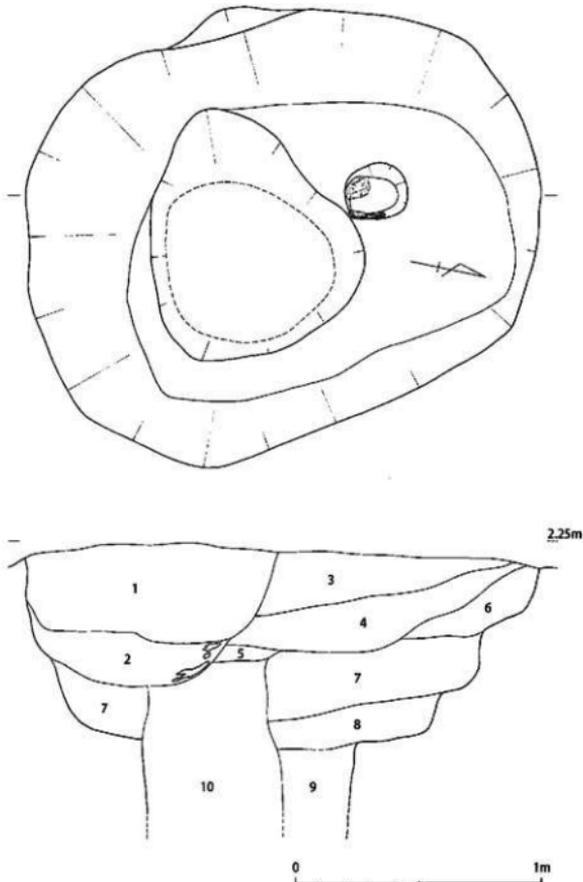


第28図 SE08 出土遺物 (1・2は1:3、3は1:4)

瓦である。2の上面には布目痕が、3には木挽き痕が残る。下面はともに縄目痕が残る。

4・5は軒丸瓦で、巴文の意匠が施される。5の瓦当には木挽き痕がある。6～8は丸瓦である。上面には縄目痕はないものの、他の丸瓦には残存するものが少なくない。下面の端部や小口部にはヘラケズリを施すが、それ以外には布目痕がある。それ以外の事例にヘラケズリを施すものもある。

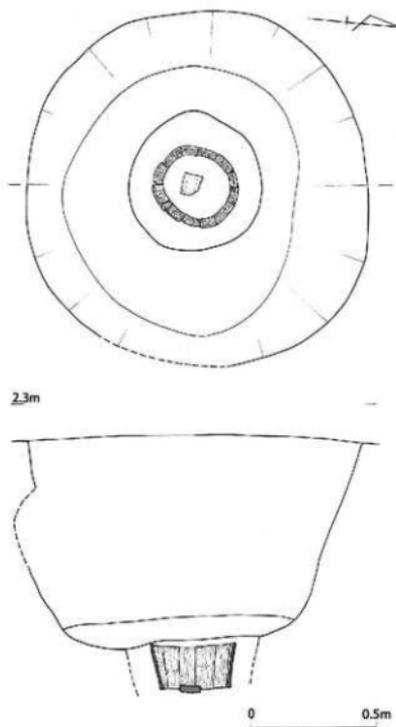
SE06の井筒に転用された瓦は、上面に縄目痕が残るもの、あるいはこれをナデ消すものが、下面には木挽き痕があるもの、縄目痕があるあるいはヘラケズリ等を施すものなど、多様な技法が認められる。よって、使用された瓦が生産された時期には、相当の時期幅を考慮する必要があるだろう。一方、井筒内から出土した遺物は極めて少なく時期は判然としないが、井筒内に流入した堆積土の中に常滑焼甕や備前焼播鉢(V期Ⅱ)の体部片が出土しており、中世後期に



1. 灰色 (Hue2.56.5/1) 中粒砂 土器・瓦片を含む。
2. 湧水により崩壊。
3. 灰色 (HueN6/0 ~ 5/0) 粗～中粒砂 上層細片・黄色粘土 (Hue5Y7/6) 等のブロックを極少量含む。
4. 灰色 (Hue5Y4/1) 極細～中粒砂 同色粘土～シルトブロックを含む。
5. 淡黄色 (Hue5Y8/3) 中粒砂 灰白色粘土ブロックを含む。
6. 灰色 (HueK4/0) 粗～中粒砂 河原石大の灰白色粘土ブロックを少量含む。
7. 灰色 (HueSY5/1 ~ N5/0) 粗～中粒砂 同色粘土～シルトブロックを含む。
8. 灰色 (Hue5/1) 粗～中粒砂
9. 灰白色 (Hue5Y7/1) 均質な中粒砂 (基盤礫の2次堆積)
10. 灰色 (HueK5/0) シルトブロック (Hue5Y5/1 ~ 6/1 灰色等) に中粒砂を極少量含む。

第29図 SE08 平面・断面図 (1:20)

## 2. 調査の成果



第30図 SE09 平面・断面図 (1:20)

1は、井筒内から出土した土師器小皿である。口径は6.6cmに復元され、残存高は1.3cmをはかる。内面から口縁部の外面にかけて横ナデを施すが、体部外面には押圧痕が残る。

2は、備前焼擂鉢である。口径は23.6cm、底部径は9.4cmに復元され、器高は9.0cmをはかる。内面には9本前後の櫛状の原体によって、摺り目が施される。内面から口縁部外面にかけては横ナデを、体部には横ナデを施すが、押圧痕が残る。また、底部外面は押圧痕が残る。IV期(15世紀後半)の所産であろう。

3は、瓦質土器羽釜である。口径は39.0cm、罎径は44.6cmに復元され、残存高は4.5cmをはかる。内面は板ナデを、罎部の下部はヘラケズリを施す。口縁部外面には強いナデにより、2段の段差が形成される。

2から、SE08 A～Cは15世紀頃の所産と考えられる。

SE09 調査区東部で検出した井戸である。直径1.35m前後、深さ1.05mをはかる。基底面に直径0.5m前後、深さ0.2mの土坑を掘削して、直径0.35m前後の底板をはずした桶を水溜として設置する。土層の堆積状況からは、井戸枠等の存在は想定できないが、他の井戸の事例をふまえると廃



第31図 SE09 出土遺物 (1:3)

さ0.1m程度の水溜があり、その掘形に沿って桶材の破片が出土している。また、水溜の中層付近からは、本報告に掲載できなかったものの、刃部を損傷した包丁と鎌の破片が、最下層からは人頭人の河原石が出土した。08Bは長軸長2.1m、短軸長1.65mをはかる。井戸枠は一切出土しなかったが、土層断面・掘形の形状から水溜、井戸枠と伴う可能性が高い。08Cは、土層断面から南北長1.05m前後、0.6mの規模をはかる。

SE08からは、第28図の遺物が出土したが、これらの遺物の帰属関係は明確ではない。

絶時に杵材などは撤去された可能性が十分に考えられる。

SE09 からは、第31図の遺物が出土した。

1は和泉型瓦器碗である。口径は13.2cmに復元され、残存高は1.7cmをはかる。口縁部外面には横ナデを、体部外面には押圧を施す。体部内面には圈線状の暗文を施す。IV期の所産であるが、詳細は不明である。

2は土師器小皿である。口径は9.4cmに復元され、残存高は1.65cmをはかる。残存部分から、器高はそれほど大差ないと考えられる。内面から口縁部外面にかけては横ナデを施すが、体部外面には押圧痕が残る。

3は、古瀬戸火入れである。口径は10.4cmをはかり、残存高は3.7cmをはかる。内外面には、回転ナデを施す。口縁部内面から外面にかけて、施釉する。

SE10 調査区東部で検出した井戸で、南半分はSE09に削平されている。井戸枠等は残存していなかったため、平面・断面図は割愛した。東西長1.0m、深さ0.35mをはかり、直径0.5m前後の井戸枠もしくは水溜を設置したと考えられる。

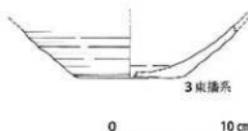
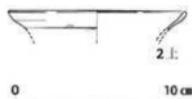
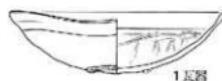
SE10から出土した遺物を、第32図に掲載した。

1は、灰釉陶器の口縁部である。器種は特定できないが、皿もしくは小碗の可能性が高い。口径は10.2cmに復元され、残存高は1.5cmをはかる。内外面に、回転ナデを施す。内面だけ施釉されているが、施釉方法は不明である。この遺物は混入品であるが、第1次調査区からこの時期の遺構が検出されているので掲載した。

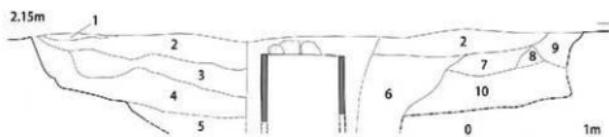
SK01 調査区中央西よりで検出した大型の土坑で、SE02～04に削平されている。不整長方形の平面形を呈し、長辺長4.6m、短辺長3.7m前後をはかる。最下層まで完掘できなかったため、土坑の深さは不明であるが、検出面から0.7m以上の深



第32図 SE10 出土遺物 (1:3)



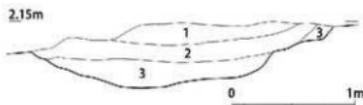
第33図 SK01 出土遺物 (1・2は1:3, 3は1:4)



1. 灰色 (HueN4/0) 中粒砂に暗灰色 (HueN3/0) 細～極細粒砂ブロックを多く含む。
2. 灰色 (HueN5/0) 中粒砂に明青灰色 (Hue10B7/1) シルトブロック等を含む。
3. 灰色 (Hue2.5Y5/1～N5/0) 中粒砂に明青灰色 (Hue5B7/1) シルトブロックを含む。
4. 灰色 (Hue2.5Y6/1～5/1) 中粒砂・黒褐色 (Hue2.5Y3/1) 細粒砂のラミナ
5. 灰色 (Hue5Y5/1) 中粒砂・灰色 (Hue N 5/0) 細～極細粒砂のラミナに灰白色 (HueN8/0) シルトブロックを含む。
6. 青灰色 (Hue5B6/1) 中粒砂 灰白色 (HueN8/0) シルト・粗粒砂ブロックを含む。
7. 灰白色 (HueN7/0) ～灰色 (HueN6/0) 均質な中粒砂
8. 灰白色 (HueN8/0) 均質な中粒砂
9. 灰白色 (HueN7/0～8/0) 均質な中粒砂に黒褐色 (Hue10YR3/1) 細粒砂のラミナ
10. 湧水による崩壊につき、不明。

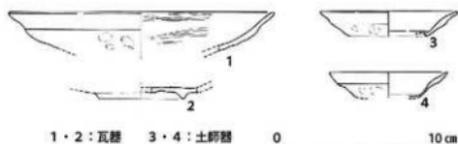
第34図 SK01 断面図 (1:40)

## 2. 調査の成果



1. 褐灰色 (Hue10YR4.5/1) 中粒砂 粗～極細粒砂を含む。土器を含む。
2. 黄灰色～灰色 (Hue2.5Y4/1～N4/0) 中粒砂のラミナ
3. 暗灰色 (HueN3/0) 粗～中粒砂 扇形付着に灰色 (Hue5Y6/1) 中粒砂の層状ブロックが堆積する。

第35図 SK04 断面図 (1:40)



第36図 SK04 出土遺物 (1:3)

1は、最下層から出土した和泉型瓦器碗である。口径13.2cm、器高3.7cmをはかる。内面には複雑なヘラミガキを、口縁部には横ナデ、見込みには平行線状暗文を施すが、体部外面には押し痕が残る。高台は粘土紐を貼り付けただけのもので、全周しない。IV-1期の所産と言える。

2は、土師器小皿である。口径は10.8cmに復元したが、口縁部は著しく歪んでいる。残存高は1.2cmをはかる。口縁部に横ナデを施す。

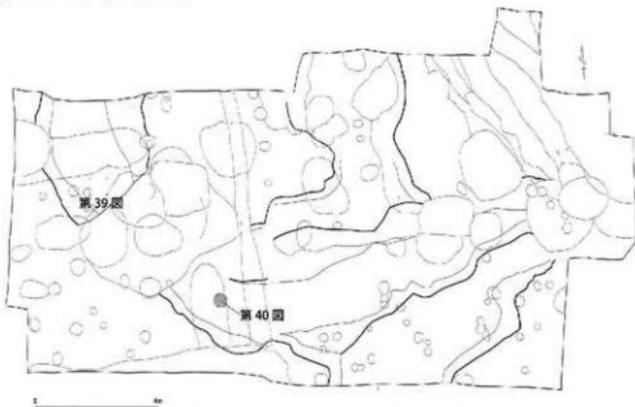
3は、東播系須恵器こね鉢である。底部径は9.6cmに復元され、残存高は4.3cmをはかる。体部外面には回転ナデを、内面は使用により器面が摩耗している。底部外面には、回転糸切り痕が残る。

これらの遺物のうち、最下層から出土した1をもとに、SK01は13世紀後半までに掘削されたとと言える。また、SE02～04はこの遺構が埋没した後に掘削されていることから、14世紀前後には完全に埋没していたと考えられる。

さとなることは確実である。

土坑中央付近の基底面の中央南よりの一部は、さらに一段深く掘削されており、水溜を備える構造であったと推定できる。また、土坑の断面形状は袋状を呈し、下層埋土は掘形から基盤層が流出した再堆積土で、上部の地盤が陥没した状況が想定されるなど、水位の変化が激しかったことを示唆する。SK01は平面形の特徴こそ大きく異なるものの、中世前期の建物群に伴う井水遺構と同じ性格の土坑と考えられる。

SK01からは、第33図の遺物が出土した。



第37図 SD01 平面図 (1:160)

**SK04** 調査区東部で検出した、楕円形状の平面形を呈する土坑である。SD09の東端部分と重複する。南北長2.5m、深さ0.5m程度をはかる。埋土は上下2層に大別できる。このうち、下層(土層3)は基盤層の再堆積土で、上層(土層1・2)も自然堆積である。基底面に水溜等を設置した形跡もなく、土層断面にも井筒等の痕跡はないことから、この遺構が井戸となる可能性は乏しいと判断した。

SK04からは、第36図の遺物が出土した。

1・2は和泉型瓦器碗である。1の口径は16.2cmに復元され、残存高は2.3cmをはかる。内面には粗雑なミガキを、口縁部外面にかけては横ナデを施す。体部外面には押し痕が残る。2の高台径は5.0cmに復元され、残存高0.7cmをはかる。見込みには斜格子状の暗文を施す。口径の復元には問題を残すものの、IV期の所産と考えられる。高台はナデにより貼り付けられ、三角形の断面を呈する。Ⅲ期の所産で、中河内方面からの搬入品である。

3・4は土師器小皿である。3の口径は8.2cmに復元され、器高1.5cmをはかる。4の口径は7.0cmに復元され、器高1.5cmをはかる。どちらも内面から口縁部外面にかけては横ナデを施すものの、体部外面には押し痕が残る。

これらの遺物から、SK04は14世紀前後の所産となる可能性が考えられる。

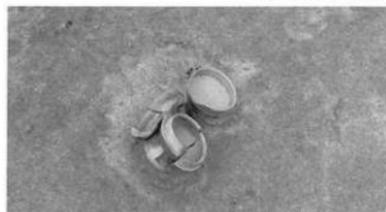
**SD01** 調査区北西から東方へ広がり、調査区東端付近で途絶する溝状の遺構である。調査区中央付近で南北幅3.7m、深さ0.55m、調査区北西部で東西幅3.7m、深さ0.6mをはかる。調査区中央東よりで、南北方向に拡張し、十字路状の形態を呈するが、この南北の拡張部分は別遺構の可能性も残る。

堆積土は、出土遺物の時期から2層に大別される。そのうち、下層は東方向から徐々に堆積するように見受けられ、常態的な流水あるいは止水環境に伴う堆積の可能性はない。上層は均質な黒褐色細



1. 黒褐色 (Hue10YR3/2) ~ 灰褐色 (Hue10YR4/1) 均質な中粒砂 土器細片極少を含む。
2. 黄~黄灰色 (Hue2.5Y8/6 ~ 5/1) 中~粗粒砂
3. 暗灰色 (Hue2.5GY3/1) 中粒砂
4. 灰白~灰色 (Hue7.5Y7/1 ~ N4/0) 中~細粒砂
5. 暗灰色 (HueN3/0) 極細粒砂に中粒砂を含む。土器細片・植物遺体を含む。
6. 灰白 (Hue7.5Y7.5/1) 細~中粒砂 暗灰色シルトブロックを含む。土器細片を極く少量含む。
7. 灰色 (Hue5Y4/1) 中~粗粒砂 土器片を含む。
8. 灰白色 (Hue5Y7/2) 粗粒砂
9. 灰色 (Hue5Y4/1) 中粒砂 シルト~極細粒砂を含む。
10. 明青灰色 (Hue10BG7/1) 中粒砂 同色ブロックを多く含む。

第38図 SD01 断面図 (1:40)

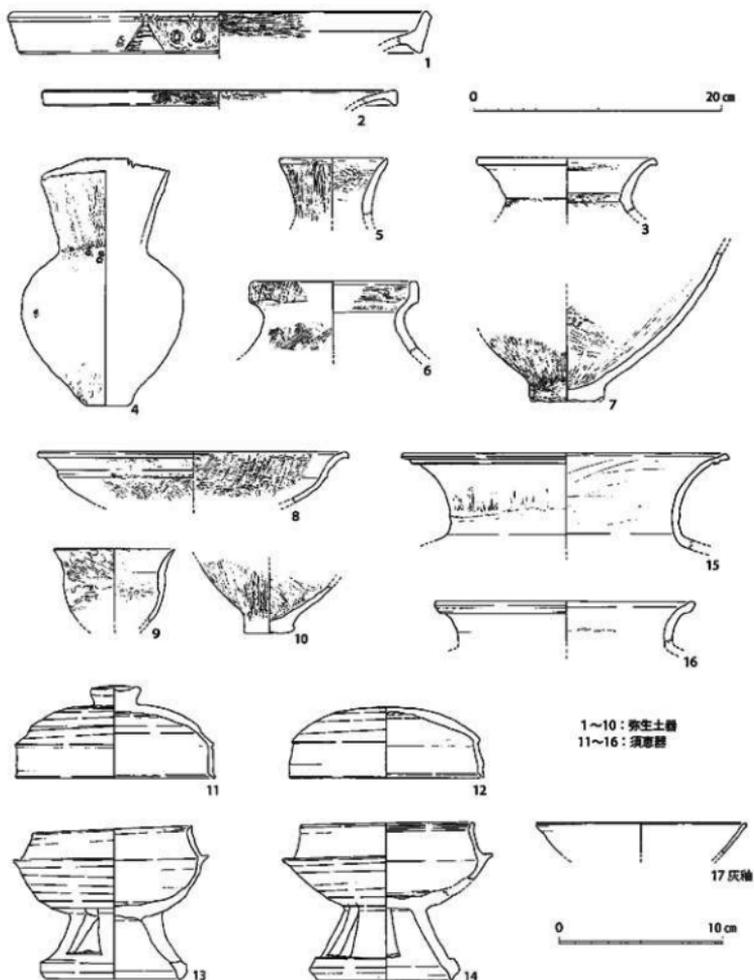


第39図 SD01 西部遺物出土状況



第40図 SD01 中央部遺物出土状況

2. 調査の成果



第41図 SD01 出土遺物 (1~10・15・16は1:4、11~14・17は1:3)

粒砂で、低湿地に堆積する腐植土と類似する。調査区北西部において、上下層の層境から須恵器高杯が直立する状態で、蓋と共に5セット分が出土した。ただし、現地写真撮影・図化できたのは蓋2個体と高杯1個体にとどまる。また、調査区中央付近の最下層において、弥生土器大型壺（未実測）が直立した状態で出土した。壺の上半部は上層掘削時に確認しており、長時間直立したまま放置されていたと推定できる。これ以外に、調査区中央付近で弥生時代の完形の壺などが散在的に出土している。なお、遺物にはまともではなく、小型の破片が主体を示す。しかし、遺物のほとんどは摩耗して

いないことから、北方に展開する集落から廃棄された所産と考えられる。ただし、集落中央部を貫流する旧天竺川に推定される河道では、大型片もしくは半完形品が多く出土するのは対照的なあり方と言える。

SD01からは、第41図の遺物が出土した。

1は弥生土器壺の口縁部である。口径は33.4 cmに復元され、残存高3.4 cmをはかる。口縁部は上方に拡張され、側帯には半裁竹筥による円形浮文と、櫛書きによる鋸歯文が交互に施される。口縁端部には、ジグザグ文状の線刻が認められる。口縁部内面は横方向のヘラミガキを、外面は縦方向のヘラミガキを施す。口縁部の形態や鋸歯文などの特徴から、瀬戸内沿岸部からの搬入品と考えられるが、搬出元は特定できない。

2・3・6は、弥生土器大口壺である。2の口径は28.6 cmに復元され、残存高1.2 cmをはかる。口縁端部は肥厚し、側帯は櫛書きで波状文を施文する。口縁部内面は不定方向のヘラミガキを、口縁端部の内外面には横ナデを施す。3の口径は14.1 cmに復元され、残存高4.6 cmをはかる。口縁部の内外面には横ナデを、頸部の内面は横方向のハケ、体部の外面には縦方向のハケを施す。口縁端部は肥厚するものの、側帯は形成していない。6の口径は13.0 cmに復元され、残存高5.8 cmをはかる。口縁部は上方に拡張され、側帯には斜め方向の刻み目文が施文される。口縁部の内面にはハケ状工具によるナデが、体部外面にはハケを施すが、幅0.9 cm単位の原体を縹杉文状に交差させており、加飾性がある。頸部から体部にかけての内面および頸部外面の調整は不明である。搬入品であることは疑いないが、産地は不明である。

4・5は弥生土器直口壺である。4の口径は10.4 cm、体部最大径は13.2 cm、底部径は3.3 cm、器高20.0 cmをはかる。外面は縦方向のハケを施すが、内面の調整は不明である。肩部に3つの半裁竹筥文を施すが、加飾性は乏しい。体部中央付近に、焼成後の穿孔がある。5の口径は8.6 cm、残存高は4.7 cmをはかる。口縁部内外面に横ナデを、頸部内面は横方向の板ナデ、外面には縦方向のヘラミガキを施す。口縁部はやや内反する。

7は弥生土器壺である。底部径は6.0 cmをはかり、残存高は12.1 cmをはかる。体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面には板ナデを施す。底部の周囲には押圧痕が残る。

8は弥生土器高杯である。口径は24.8 cmに復元され、残存高4.2 cmをはかる。口縁部内面には粗雑な横ナデのあとに放射状暗文を施す。底部の内外面には、不定方向のヘラミガキが施される。

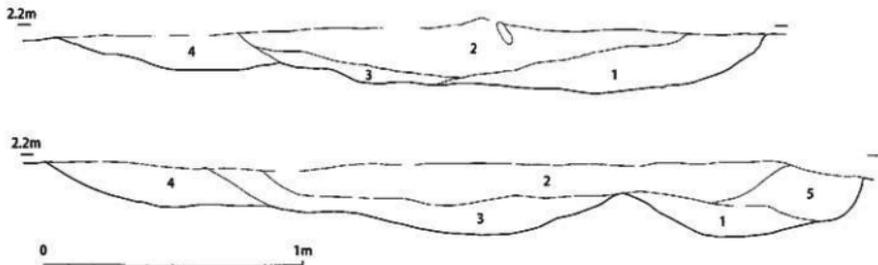
9は弥生土器鉢である。口径は9.6 cmに復元され、残存高6.0 cmをはかる。内面の上半分は横ナデを、体部外面にはタタキのあとナデを施す。口縁部外面には、成型時の押圧痕が残る。

10は弥生土器鉢と考えられるが、壺の可能性も残る。底部径4.0 cm、残存高6.5 cmをはかる。体部の外面には縦方向のヘラミガキを、内面には板ナデを施す。底部の外面にはヘラミガキを施した可能性もあるが、明確ではない。

これ以外に調査区中央付近において、大型の壺が出土しているが、整理期間の都合から、実測できなかった。

11・12は須恵器坏蓋である。11の口径は12.1 cm、器高5.6 cmをはかる。天井には、直径3.0 cmのつまみが貼り付けられている。口縁部と天井部を区画する稜と口縁端部の段は、比較的明確であるが、鋭さはない。天井部外面は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデを施す。12の口径は11.6 cm、器高4.3 cmをはかる。つまみが貼り付けられていない以外の特徴は、11と同じである。

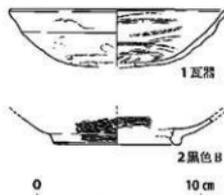
## 2. 調査の成果



1. 灰色 (Hue5Y5/1) 中粒砂
2. 灰色 (Hue5Y4/1 ~ N4/0) 細~中粒砂 極細粒砂を含む。土器破片を極少量含む。
3. 灰色 (HueN4/0 ~ 5/0) 中粒砂
4. 灰オリブ色 (Hue5Y6/2) 中粒砂 青灰色 (Hue10BG5/1) 細粒砂ブロックを含む。炭化物・土層を極少量含む。
5. 緑灰色 (Hue5G5/1) 中粒砂 シルト~極細粒砂を含む。

第42図 SD06 断面図 (1:20)

13・14は、須恵器高杯である。13の口径は9.6cm、受部径は11.9cm、裾部径は8.2cmをはかる。14の口径は10.2cm、受部径12.6cm、裾部径8.0cm、器高9.6cmをはかる。13・14は、坏部外面に回転ヘラケズリを施し、それ以外は回転ナデである。脚部には3方向に台形状の穿孔がある。13の口縁端部の段は不明瞭である。一方、14の口縁端部の段は、凹線化している。受部端部ともに、丸みを帯び、鋭さにかける。



第43図 SD06 出土遺物 (1:3)

15・16は須恵器壺の口頸部である。15の口径は26.0cmに復元され、残存高は7.8cmをはかる。口縁部直下に断面三角形の突帯が垂下するが、あまり鋭さはない。16の口径は20.6cmに復元され、残存高は3.7cmをはかる。口縁部は肥厚し、やや玉縁状の断面形を呈する。

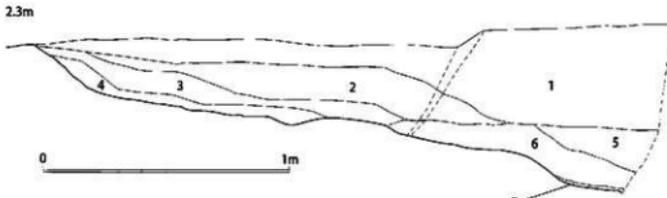
17は、灰釉陶器碗である。口径は12.6cmに復元され、残存高は1.9cmをはかる。口縁部の内外面はハケ塗りで施軸されている。上層から出土しているが、混入品とは言いがたい。

SD01の上層下部から古墳時代中期末の高杯が一括で出土している一方で、最下層からは弥生土器大型壺が直立した状態で出土した。さらに上層からは、平安時代中期の遺物も出土していることから、この溝が長期にわたって継続したこと、また調査区一帯が弥生時代終末期以降に沖積作用の影響をほとんど受けなかったことは疑いない。その一方で、溝以外に古代以前の遺構は検出されておらず、また溝自体の平面形からも、人為的な目的によって掘削された可能性は乏しいと考えられる。

SD06 調査区北東部で検出した、落ち込み状の遺構である。遺構西側の掘形は不明瞭で、SD09まで広がる可能性があることから、自然地形上に堆積した遺物包含層とも見なせる。検出部分では東西3.0m前後、深さ30cm程度をはかる。

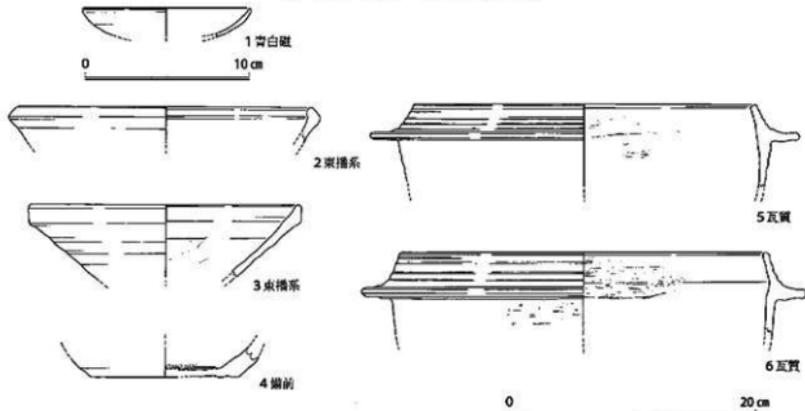
SD06からは、第43図の遺物が出土した。

1は和泉型瓦器碗である。口径は13.2cmに復元され、残存高は3.5cmをはかる。口縁部には横ナデを施すが、体部外面には押圧痕が残る。体部内面には粗雑なミガキが、見込みには平行線状暗文が施される。IV-1期の所産である。



1. 褐灰色 (Hue7.5YR6/1) 中～極細粒砂 土器細片を極少量含む。
2. 灰色 (HueN5/0) 中粒砂 シルトを含む。
3. 灰色 (HueN5/0～6/0) 中粒砂
4. 灰白色 (Hue2.5Y7/1)・灰色 (HueN6/0) 中粒砂のラミナ
5. 明オリーブ灰色 (Hue2.5GY7/1) シルト 植物遺体を含む。
6. 灰色 (HueN6/0) 中～極細粒 植物遺体を含む。
7. 灰白色 (Hue2.5GY8/1) 均質なシルト

第44図 SD09 断面図 (1:20)



第45図 SD09 出土遺物 (1は1:3、2～6は1:4)

2は、楕葉型の黒色土器B類碗である。高台径は7.6cmに復元され、残存高は1.6cmをはかる。体部外面には分割ヘラミガキを、高台の外面にもヘラミガキを緻密に施すが、高台内は横ナデである。体部の内面には緻密なヘラミガキを、見込みには連結輪状暗文が施される。10世紀後半の所産であり、明らかに混入品である。東方に位置する第1次調査区において、この時期の遺構が検出されており、それに関連する遺物と言える。

SD09 調査区の東端で検出した落ち込み状の遺構で、規模等は明確ではない。検出部分で長さ7.0m、深さ0.75mをはかる。上層は褐灰色細粒砂で、洪水等の沖積作用に伴って埋没した可能性が考えられる。下層部は基盤層の再堆積土で、流水等の形跡は認められない。SD06との関係から、地形変換点となる可能性もあるが、判然としない。

なお、事業者によると、戦前から敷地東側の道路に沿って、石組みで護岸した水路があったとのことであり、この水路に先行する遺構の可能性は十分にある。しかし、昭和17年の航空写真(大阪市都市計画局所蔵)では、水路の存在は明確に確認できなかった。

SD09からは、第45図の遺物が出土した。なお、遺物の多くは、上層から出土した。

1は、青白磁小皿である。口径は10.2cmに復元され、残存高は1.7cmをはかる。内外面に施軸するが、

### 3. まとめ

細かい買入が認められる。

2・3は、東播系須恵器こね鉢である。2は口径23.4cmに復元され、残存高は2.9cmをはかる。口縁部の内外面に、回転ナデを施す。口縁部は内反気味に肥厚し、玉縁状の断面形を呈する。3の口径は22.0cmに復元され、残存高は5.9cmをはかる。口縁部の内面から体部の外面にかけて回転ナデを、体部の内面は回転ナデの後に板ナデを施す。口縁端部は上方に突出し、幅広い側帯を形成する。

4は、備前焼播鉢である。底部径は12.0cmに復元され、残存高は2.5cmをはかる。内面には7本前後の櫛状の原体によって、摺り目が施される。底部の外面は押しが残り、体部の外面には回転ヘラケズリが施される。

5・6は、瓦質土器羽釜である。5の口径は27.6cm、鏝径は34.8cmに復元され、残存高は7.7cmをはかる。口縁部の外面にはナデにより2段の段が形成している。内面は不明瞭ながら、板ナデの可能性はある。鏝下部から体部の外面にかけては、付着物のために調整は不明である。6の口径は29.6cm、鏝径は36.0cm、残存高は6.7cmをはかる。口縁部外面には強いナデにより、2段の段差が形成されている。鏝下部から体部の外面にかけては横方向のヘラケズリを、内面は板ナデを施す。

これらの遺物は概ね中世後期であるが、時期幅が大きい。ただし、ほとんどのものが上層土中であることをふまえると、埋没した時期は中世後期にでも15世紀以降になると考えられる。

### 3. まとめ

今回の調査では、弥生時代終末期～平安時代中期にかけて堆積したと考えられる自然地形に伴う溝と、13世紀後半～戦国時代の10基以上におよぶ井戸、土坑などを確認した。このうち、SD01においては、各時代を通して何らかの祭祀が行われた可能性が高く、ここが単なる微高地という地形上の意味にとどまらない存在であったと推測できる。また、当微高地において本格的な集落が展開するのは13世紀後半になるが、これは字「少路」の集村化に伴う。しかしながら、当調査区において検出した遺構に、居住に耐える構造の掘立柱建物が復元できるような柱穴は検出されず、一帯に集落を構成するような規模の建物群が存在した可能性はない。さらに、検出した遺構の主体は井戸であるにも関わらず、井戸廃絶儀礼等にかかわる遺物も非常に少なく、まとまった遺物が出土するような遺構もなかった。このように、中世後期の遺構は生活感がほとんど感じられないことで指摘できる。その一方で、SE06のような瓦・石組の井戸があり、さらに各遺構から出土した遺物に占める瓦の比率は非常に高い。瓦が寺院に伴う遺物であることは、各地の事例で説明されるばかりではなく、当遺跡の東方に位置する北条遺跡・小曾根遺跡においても確かめられている。よって、当調査区の一帯が字「少路」の一角に建立された寺院（村寺）の境内に含まれる可能性は非常に高い。

当調査区において検出されたのは、井戸と井水遺構が主体であるように、一帯は水場としての意味合いが強い。しかし、その周辺において本堂等の遺構が確認される可能性は非常に高く、今後の発掘調査にあたっては礎石痕など寺院関連遺構の存在に、特に留意する必要があるだろう。

## 第IV章 蛭池遺跡第10次調査

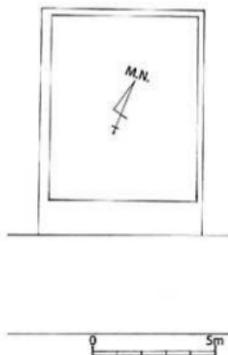
### 1. 調査の経緯

今回の調査地は蛭池中町2丁目58-4に所在する。平成26年3月11日、今回の調査地北隣(2丁目58-1)において提出された土木工事に伴う発掘の届出に基づき同3月25日に確認調査を実施したところ、地表下30cmのところでは基盤層を検出し、その上面で遺構を確認した。よって、地表下30cm以上の掘削工事が実施される場合は記録保存のための本発掘調査が必要であることを事業主側に伝えた。

その後、平成26年7月30日に提出された今回の調査地にかかる土木工事に伴う発掘の届出は、申請建物の基礎掘削工事は地表下40cm以上に及び、現行の計画では本発掘調査が必要である旨を伝えた。しかし事業主側に計画変更の予定はなく遺構の破壊が免れないことが事実になったため、協議の結果、本発掘調査を実施することになった。

調査範囲と期間は、基礎工事(ベタ基礎)の範囲43.4mを平成26年8月25日から9月22日にかけて行った。

### 2. 調査の成果



第46図 調査範囲図  
(1:200)



第47図 調査地位置図 (1:5,000)

## 2. 調査の成果

### (1) 遺跡の概要

蛸池遺跡は豊中市北西部、下里丘陵から南西に張り出した低位段丘、標高 22～23m に位置する。1992 年から 9 年にわたる発掘調査を実施しており、なかでも財団法人大阪府文化財センターによる大阪モノレール建設に先立つ調査（麻田藩陣屋跡第 7～8 次調査：文献 1）、蛸池駅西地区再開発事業に伴う発掘調査（麻田藩陣屋跡第 10 次調査：文献 2）は、いずれも広域な調査であったため同遺跡の面的な様相が判明するに至っている。主な遺構は古墳時代後期から奈良時代にかけて形成された土坑群、奈良時代の掘立柱建物などから、遺跡の盛期は古墳時代後期～奈良時代とみられる。

ところで今回の調査地は近世麻田藩陣屋跡の範囲内に位置しており、明治六年陣屋破却直前段階に描かれた陣屋絵図（新人物往来社 1981『日本城郭体系』12 巻）によれば、藩主邸よりも南方、字南町に所在し、一帯は家臣団の屋敷地にあたる。

今回は主に古墳時代後期～奈良時代の集落跡が検出された麻田藩陣屋跡第 10 次調査 E 地区と近接した所に所在することから、調査では当該時期の遺構、さらには残存状況が良好であればその上層に麻田藩陣屋跡関連の遺構が残存する可能性も考えられた。

### (2) 基本層序

調査は機械により現代の盛土を除去し、その後は人力による掘削を行った。層位名は上層より 1 層とし、4 層・5 層直上面において遺構面を確認し、本概報ではそれぞれ第 1 面・第 2 面として報告する。

1 層：現代の盛土

2 層：褐灰色 (10YR6/1) 極細粒砂に礫（直径～3 cm）が少量、微細なブロック土、炭化物が含まれる。同層直上面については麻田藩陣屋の遺構面の可能性も考えられたが、残存状況が悪く遺構・遺物ともに確認することができず、その存否については不明である。

3 層：黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂。微細ながら土師器、磁器碎片を含む中世～近世の遺物包含層である。同層直下は中世～近世の遺構面（第 1 面）を確認している。

4 層：褐灰色 (10YR4/1) 極細粒砂を主体とし、層中には直径 1～3 cm の黒褐色粒が斑状にみとめられる。古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器を含む遺物包含層である。

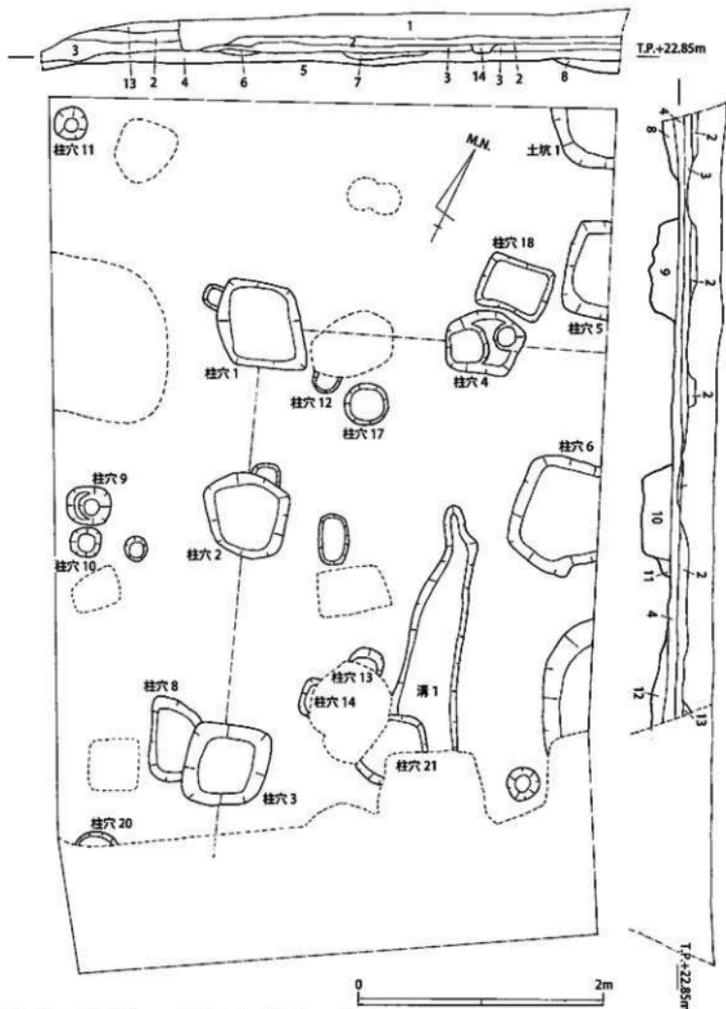
5 層：黄色 (2.5Y8/6) シルト～極細粒砂を主体とし、礫（直径 3～5 mm）を少量含み、低位段丘を形成する基盤層でもある。直上面は古墳時代後期～奈良時代の遺構面（第 2 面）である。

### (3) 検出した遺構と遺物

#### ・第 2 面（古墳時代後期～奈良時代）の遺構と遺物

ここでは 5 層（基盤層）直上面で検出の遺構と遺物について取り上げる。主な検出遺構は、掘立柱建物 1 棟、柱穴列 1 列、溝 1 条、柱穴またはピット 15 基であった。

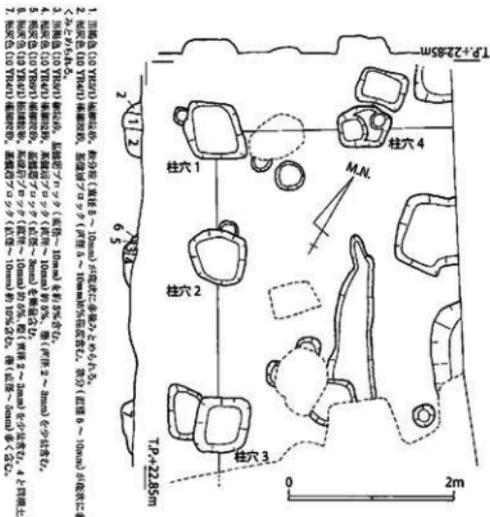
掘立柱建物 1 部分的な検出であるが南北 2 間以上、東西 1 間以上の掘立柱建物であり、柱間間隔



1. 現代の富士。2. 褐色(10YR6/1)細粒砂。3. 黄褐色(10YR6/6)細粒砂。
4. 褐色(10YR4/1)極細粒砂。暗褐色(10YR6/8)極細粒砂(鉄分?)が斑点状に多数みとめられる。直上面は中世～近世の遺構面(第1面)。
5. 黄色(2.5YR/6)シルト～極細粒砂。礫(直径3～5mm)を少量含む。調査区の基礎層。直上面は古墳時代後期～奈良時代の遺構面(第2面)。
6. にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂。礫(直径～5mm)を少量含む。第1面溝1埋土。
7. にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂。礫(直径～5mm)を少量含む。第1面溝2埋土。
8. 褐色(10YR4/1)細粒砂。第2面土坑1埋土。
9. 褐色(10YR4/1)細粒砂。基礎層ブロック(直径～1cm)を約10%含む。礫(直径～3mm)を少量含む。第2面柱穴5埋土。
10. 褐色(10YR4/1)細粒砂。基礎層ブロック(直径～1cm)を約10%含む。礫(直径～3mm)を少量含む。第2面柱穴6埋土。
11. 褐色(10YR4/1～5/1)細粒砂。基礎層ブロック(直径～1cm)を約10%含む。礫(直径～3mm)を少量含む。
12. にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂。基礎層ブロック(直径3～5mm)少量含む。
13. 褐色(10YR4/1)極細粒砂。暗褐色細粒砂を約20%含む。礫(直径2～10mm)、微細な炭化物を少量含む。
14. 褐色(10YR6/1)極細粒砂。

第48図 調査区(第2面) 平面・断面図(1:40)

## 2. 調査の成果

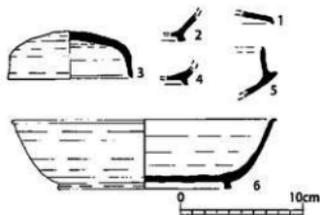


第49図 掘立柱建物1 平面・断面図 (1:60)

柱穴列 調査区東端で検出した2基の隅丸方形の柱穴列(柱穴5・6)である。これらの柱穴は掘立柱建物の一部であることも考えられるが、全容不明のため、ここでは柱穴列として報告する。いずれも一部を検出したのみであるが、一辺80cm程度の規模は、掘立柱建物1を構成する柱穴よりもやや大ききである。また掘立柱建物1と非常に近接した位置関係にあることから両遺構の同時期に併存した可能性は低いとみられる。

柱穴6は平面形が方形からやや崩れており、これは別の遺構が重複する可能性も考えられるが、断面等の観察結果の限りでは褐色板細粒砂を主体とする埋土が一様に堆積し、重複関係はみとめられなかった。柱穴5の埋土中から第50図2の須恵器杯身片が出土しており、その特徴から柱穴列の機能時期は奈良時代と考えられる。

その他の遺構と出土遺物(第50図3~5) ここでは上記掘立柱建物1と柱穴列以外の検出遺構と出土遺物について取り上げる。上記以外に調査区内からは溝1条、15基程度の柱穴またはピットが確認されている。



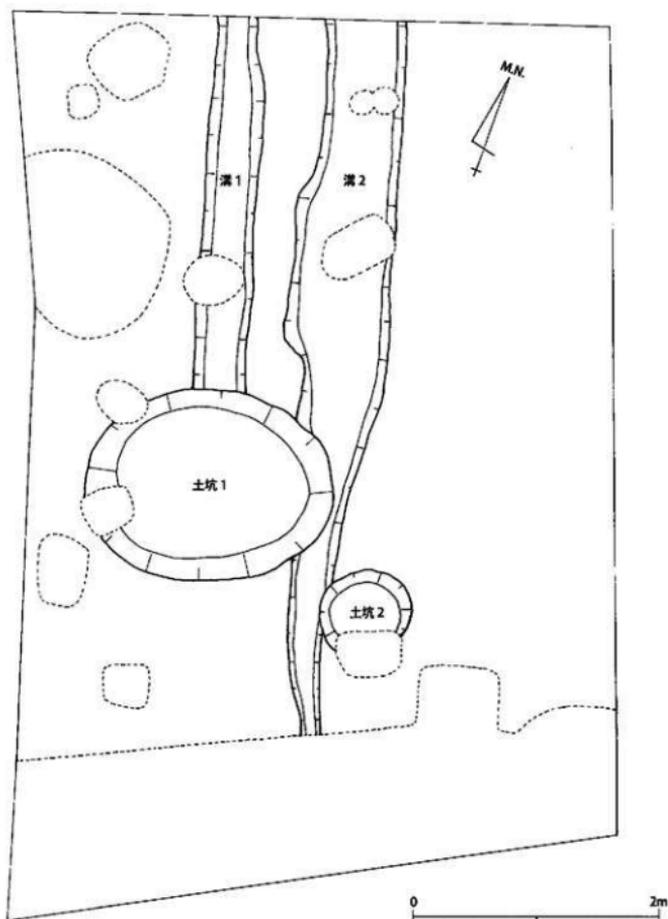
第50図 第2面出土遺物 (1:4)

調査区南側で検出した溝1は検出幅50~60cm、深度は5cm程度と浅い。埋土中に遺物はみとめられなかった。

柱穴の多くは平面円形で直径30~40cmに収まるものであった。出土遺物は図化し得た3点を報告する。第50図3は柱穴18出土の須恵器蓋である。ほぼ完形状態で出土し蓋の直径は

は1.6~2.0mをはかる(第49図)。柱穴の平面形は一辺70cm程度の隅丸方形を呈し、深度は17~24cmである。柱穴1~4の埋土は褐色板細粒砂に基盤層が直径1~2cmのブロック状に約10%含むものである。柱穴1から須恵器杯蓋(第50図1)、柱穴4から須恵器杯(第50図6)がそれぞれ出土した。

第50図6の高台付杯は20%程度の残存状況であり、復元口縁部直径21.5cm、器高5.7cmをはかる。口縁部端部は外方に開く。第50図1・6ともに8世紀代の須恵器であることから、同建物1の時期は奈良時代と考えられる。

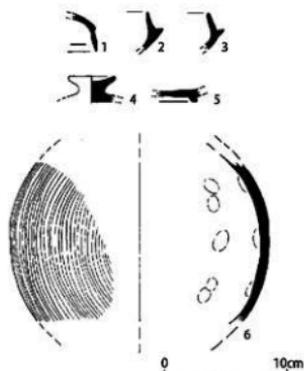


第51図 調査区(第1面)平面図(1:40)

10.0 cm、器高 3.9 cmをはかり、形態的に短頸壺に伴ったと考えられる。古墳時代後期であろう。第50図4は柱穴10出土の高台を有する須恵器杯である。底部の端部付近に高台が付く。ただ碎片ゆえに高台の直径は復元できなかった。第50図5は柱穴柱穴21出土の須恵器杯身であり、碎片ゆえに口縁部直径の復元は不明である。形態的に古墳時代後期(TK10型式期)と考えられる。

以上、第2面の遺構と遺物について述べてきたが、古墳時代後期と奈良時代の二時期が存在し、このことは既往の発掘調査成果と一致する。

### 3. まとめ



第52図 遺物包含層 出土遺物(1:4)

#### ・第1面(中世～近世)の遺構

第1面は4層(褐灰色極細粒砂層)直上面で検出された遺構である。主な検出遺構は溝2条、土坑2基であった。第1面の時期は遺構出土遺物が乏しく年代の特定が困難であったが、第1面直上面から土師器、磁器、須恵器の微細な破片が出土していることから、中世～近世という年代を推定した。

溝 2条検出した。いずれも南北方向でほぼ平行に走る。溝1は幅30～40cm、深度約5cmをはかり、土坑1以南は削平のため消滅しているが、本来は南方へ伸びていたとみられる。溝2は溝1の約80cm東側で検出されたもので、幅

30～90cm、深度5cm程度をはかる。いずれの溝も、須恵器と土師器の微細な破片が出土しているが混入品とみられる。これらの溝は耕作に伴うものと考えられる。

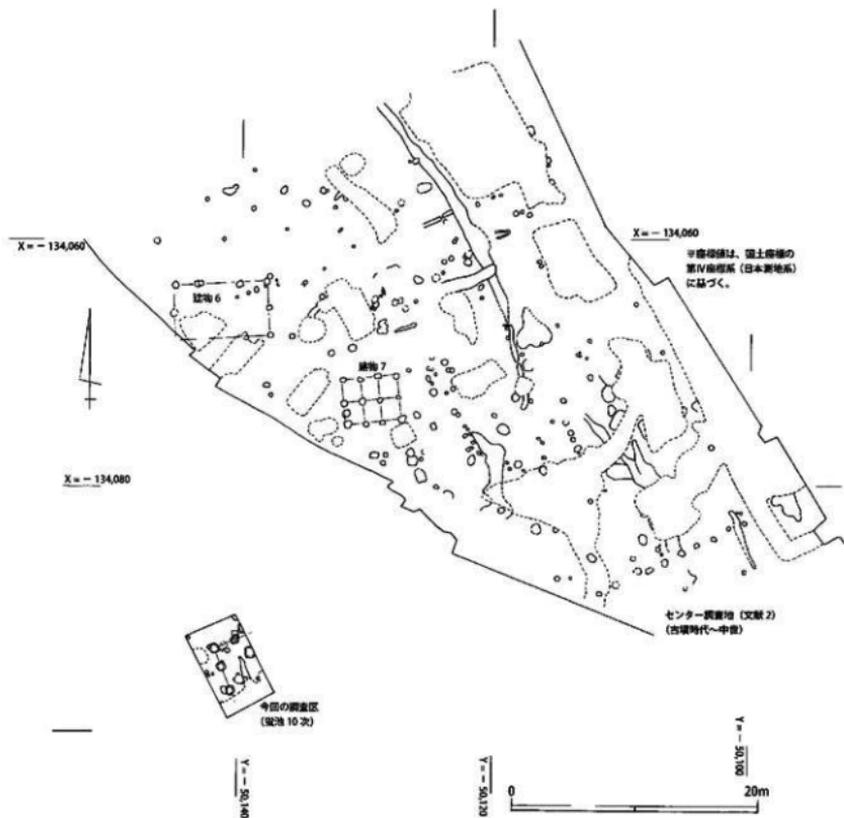
土坑 2基検出した。先述の溝1・2との重複関係は、土坑が溝を破壊しており溝が土坑に先行する状況を確認した。土坑1は東西2.2m、南北1.5mの楕円の形状を呈する。検出時はその形状と規模から井戸の可能性を考えたが、実際の深度は約15cmであり、基底面に井戸に伴う施設またはその関連施設の痕跡も確認されなかったことから土坑とした。埋土中から遺物基底面はゆるやかな丸底の形状を呈する。埋土中から須恵器破片が微量出土しているが、すべて混入品とみられる。調査区南側で検出した土坑2は直径80cm程度、深度約30cmで平面円形の形状を呈する。土坑2の埋土は無遺物であった。

遺物包含層出土遺物 ここで取り上げる遺物(第52図)は、すべて基本層4層の掘り下げ中に出土した遺物である。土師器と須恵器の破片が出土したが図化し得たものは須恵器のみであった。1は須恵器杯蓋である。TK10型式であろう。2・3は須恵器杯身であり、ともに6世紀後半代(TK10型式期)の所産とみられる。4は須恵器杯蓋のつまみ部分、5は高台付きの須恵器杯であり、その特徴から奈良時代の所産とみられる。6は提瓶体部であろう。体部の約20%が残存しており、復元直径は21cmである。外面に同心円状のカキ目、内面にユビ押しえが施される。

以上、基本層4層の出土遺物の所属時期は、古墳時代後期または奈良時代のいずれかであり、このことは第2面検出遺構ならびに出土遺物の時期と一致する。一帯に両時期の遺構が所在したことを裏付けるものといえよう。

### 3. まとめ

今回の調査地は非常に限られた調査面積であったが、掘立柱建物1、柱穴列を検出できたことは、既往の調査で知られている奈良時代の集落の様相を明らかにしていく上で重要な成果であったとい



第53図 調査区周辺における検出遺構図(1:400)

える。そして少量ながら古墳時代後期の柱穴、碎片とはいえ古墳時代後期相当の須恵器が出土している点も、当該時期の集落が存在した証といえる。また当該調査地は麻口藩陣屋の一角でもあるが、同陣屋に関連する遺構面ならびに遺構は確認できなかった。

ここで、既往の蛭池遺跡の調査成果中に今回の成果を位置付けてみる。第53図は(財)大阪府文化財センターが平成11～14年に実施した調査区(文献2)のうち、蛭池遺跡第10次調査地に近接する「5面E地区」に今回の調査地を追加したものである。「5面」は「古墳時代から古代面」であり、今回の調査では第2面(基盤層直上)に相当する。今回の調査地は、センターE地区と道路一つ隔てた西側に位置し、一帯は浅い谷地形の合間に存在する微高地上であったことが既往の発掘調査により判明している(文献2)。この微高地上に蛭池遺跡第10次調査地で掘立柱建物1、

### 3. まとめ

センターE地区で建物6・7がそれぞれ確認されており、両者間は直線距離にして約15～20mである。時期は前者が奈良時代、後者が古墳時代後期である。センターE地区の建物6は「3×2間の東西棟掘立柱建物」で柱穴の「平面形は直径0.3～0.5mの円形に近い隅丸方形」であること、建物7は「3×2間の東西棟総柱掘立柱建物」で「柱穴の平面形は一辺0.3～0.5mを隅丸方形」であった。これらは第10次調査掘立柱建物1の各柱穴の規模（一辺約70cmの隅丸方形）と較べ小ぶりで柱穴の平面形状もやや異なる。さらに第10次調査の掘立柱建物1と掘立柱建物6・7とは建物の主軸方向もやや異なることから、これは双方の建物間に時期的な隔たりが存在する可能性が非常に高い。では今回検出された奈良時代の掘立柱建物1はどの位置付けるべきであろうか。

従来、蛭池遺跡において奈良時代の遺構が確認されていたエリアは、遺跡北部、蛭池東遺跡と接する一帯と遺跡南端部であり、遺跡中央部では確認されていなかった。ところが、遺跡中央部である今回の調査地で奈良時代の掘立柱建物が新たに検出されたことにより、奈良時代段階の蛭池遺跡は地形上の制約を受けつつも遺跡全域に展開していたことが明らかになってきたといえる。

今後も調査地一帯における調査は、微地形の状況ならびに周辺部の調査成果を考慮しつつ慎重に行っていく必要がある。

#### 【参考・引用文献】

- (文献1) 財団法人大阪府文化財調査研究センター編「宮の前遺跡・蛭池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛭池遺跡・蛭池南地区・蛭池西遺跡 1993-1996年度発掘調査報告書-大阪モノレール蛭池東線・西線建設に伴う発掘調査」(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第22集 1997年
- (文献2) 財団法人大阪府文化財センター編『麻田藩陣屋跡-蛭池駅西地区第1種市街地再開発工事に伴う埋蔵文化財調査報告書-』大阪府文化財センター調査報告書第81集 2002年

## 第V章 確認調査の成果

平成25年度1月から3月および平成26年度4月から12月の間に個人住宅を対象に行なった確認調査は32件を数え、平成25年度は7件、平成26年度は25件という内訳である。このうち、3件の調査で遺構等が確認されたが、建物に伴う基礎掘削が遺構面に達しないことや建物基礎部分の設計変更などから、本格的な発掘調査を行うには至っていない。

以下、確認調査の概要について報告する。第54図に掲載した調査地点位置図の番号および各確認調査の番号は、下表の番号に対応する。

第1表 平成26年(2014年)確認調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査理由	調査面積(㎡)	調査後の状態	調査者	備考
1	板塚古墳群	中塚塚2丁目165-1の一部	20140109	個人住宅建設	38.07	無	神内	
2	山ノ上遺跡	立山町107-5の一部	20140109	個人住宅建設	82.24	無	神内	
3	山ノ上遺跡	立山町65	20140116	個人住宅建設	72.06	未	神内	盛土内
4	板塚古墳群	中塚塚1丁目93-6	20140206	個人住宅建設	78.92	無	神内	
5	松園遺跡	松園町3丁目1307-1	20140213	個人住宅建設	50.14	無	神内	
6	持妻山遺跡	持妻山町6-38	20140306	個人住宅建設	73.96	無	神内	
7	内田遺跡	松の町3丁目47-1	20140327	個人住宅建設	62.49	未	供出工事	神内 新藤井土内
8	板塚古墳群	中塚塚4丁目69-8	20140403	個人住宅建設	82.65	無	神内	
9	新倉遺跡	玉井町2丁目189-4	20140403	個人住宅建設	77.84	無	神内	
10	板塚古墳群	中塚塚1丁目	20140410	個人住宅建設	57.87	未	神内	盛土内
11	板塚古墳群・岡町南遺跡	岡町南2丁目83-8	20140417	個人住宅建設	51.39	有	再立会後、調査工事	基礎残
12	徳成遺跡	松園町3丁目1408-3	20140508	個人住宅建設	66.70	無	神内	
13	野原春日町古墳群	春日町4丁目76-30	20140515	個人住宅建設	69.89	無	横田	
14	板塚古墳群・岡町南遺跡	岡町南2丁目41の一部	20140515	個人住宅建設	78.04	無	横田	
15	板塚古墳群・岡町北遺跡	岡町北2丁目29-3	20140522	個人住宅建設	38.11	無	神内	
16	板塚古墳群・岡町遺跡	中塚塚2丁目434の第434-209 部	20140522	個人住宅建設	89.52	無	神内	
17	徳成遺跡	松園町4丁目237-6	20140605	個人住宅建設	26.15	無	神内	
18	板塚古墳群	中塚塚4丁目69-7	20140703	個人住宅建設	58.32	無	神内	
19	上津島遺跡	上津島2丁目130-9	20140828	個人住宅建設	55.85	無	横田	
20	本町遺跡	本町3丁目297-3の一部	20140904	個人住宅建設	51.69	未	横田	盛土内
21	内田遺跡	松園町3丁目149	20140911	個人住宅建設	70.23	無	横田	
22	北島遺跡	小幡橋2丁目1754の一部	20140918	個人住宅建設	121.40	無	清水	
23	熊手遺跡	刀根山2丁目224-3	20140925	個人住宅建設	92.90	無	清水	
24	板塚古墳群	中塚塚1丁目229-1の一部	20140925	個人住宅建設	94.82	無	清水	
25	上津島川床遺跡	利倉3丁目134-5,6	20141023	個人住宅建設	57.08	有	調査工事	横田 計測史
26	新倉遺跡	本町3丁目17-A,9	20141030	個人住宅建設	23.31	無	神内	
27	板塚古墳群	中塚塚1丁目22-1	20141127	個人住宅建設	72.01	未	横田	盛土内
28	竹園遺跡	竹園町4丁目73-6,9	20141127	個人住宅建設	111.10	未	横田	盛土内
29	板塚古墳群	中塚塚2丁目3-2	20141204	個人住宅建設	44.55	有	再立会後、調査工事	横田 盛土内
30	庄内遺跡	庄内町3丁目63-11	20141218	個人住宅建設	53.88	無	神内	
31	板井谷集落群	板の町2丁目40-45	20141225	個人住宅建設	26.57	無	横田	
32	高江遺跡	庄内町4丁目56-22	20141225	個人住宅建設	28.91	無	清水	



第 54 図 確認調査地点位置図

## 2014-01 桜塚古墳群

調査日：平成26年(2014年)1月9日

調査場所：豊中市中桜塚2丁目

165-1の一部

調査対象面積：38.07㎡

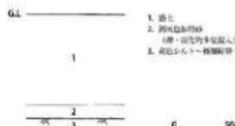
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下85～90cmにおいて基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第55図 トレンチ掘削状況



第56図 トレンチ断面図

## 2014-02 山ノ上遺跡

調査日：平成26年(2014年)1月9日

調査場所：豊中市宝山町107-5の一部

調査対象面積：52.24㎡

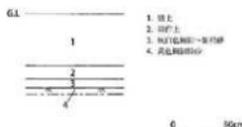
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下60cmにおいて基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第57図 トレンチ掘削状況



第58図 トレンチ断面図

## 2014-03 山ノ上遺跡

調査日：平成26年(2014年)1月16日

調査場所：豊中市宝山町65

調査対象面積：72.66㎡

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下30cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第59図 トレンチ掘削状況



第60図 トレンチ断面図

### 2014 - 04 桜塚古墳群

調査日：平成 26 年 (2014 年) 2月6日

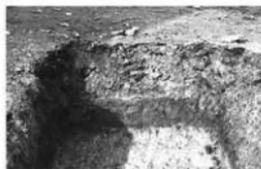
調査場所：豊中市南桜塚 1 丁目 93 - 6

調査対象面積：78.92 m<sup>2</sup>

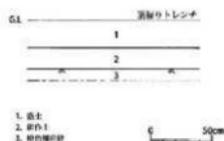
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ 1 箇所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 40 cm において基盤層を検出したが、古墳関連の明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 61 図 トレンチ掘削状況



第 62 図 トレンチ断面図

### 2014 - 05 穂積遺跡

調査日：平成 26 年 (2014 年) 2月13日

調査場所：豊中市服部西町 3 丁目  
1397 - 1

調査対象面積：50.14 m<sup>2</sup>

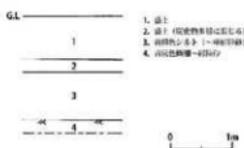
調査の方法：重機によりトレンチ 1 箇所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 170 cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 63 図 トレンチ掘削状況



第 64 図 トレンチ断面図

### 2014 - 06 待兼山遺跡

調査日：平成 26 年 (2014 年) 3月6日

調査場所：豊中市待兼山町 6 - 38

調査対象面積：73.96 m<sup>2</sup>

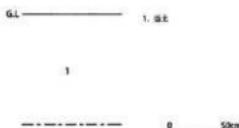
調査の方法：重機によりトレンチ 1 箇所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度 (地表下 90 cm) において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 65 図 トレンチ掘削状況



第 66 図 トレンチ断面図

## 2014 - 07 内田遺跡

調査日：平成26年(2014年)3月27日

調査場所：豊中市桜の町3丁目47-1

調査対象面積：62.49㎡

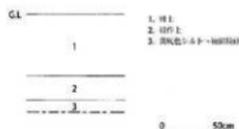
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下70cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認踏査後、慎重工事を指示。



第67図 トレンチ掘削状況



第68図 トレンチ断面図

## 2014 - 08 桜塚古墳群

調査日：平成26年(2014年)4月3日

調査場所：豊中市中桜塚4丁目69-8

調査対象面積：52.65㎡

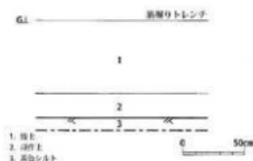
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下80cmにおいて基盤層を検出したが、古墳関連の明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第69図 トレンチ掘削状況



第70図 トレンチ断面図

## 2014 - 09 新免遺跡

調査日：平成26年(2014年)4月3日

調査場所：豊中市玉井町2丁目189-4

調査対象面積：77.84㎡

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下65cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第71図 トレンチ掘削状況



第72図 トレンチ断面図

### 2014 - 10 桜塚古墳群

調査日：平成 26 年（2014 年）4 月 10 日

調査場所：豊中市南桜塚 1 丁目 34 - 2

調査対象面積：57.87 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 30 cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 73 図 トレンチ掘削状況



第 74 図 トレンチ断面図

### 2014 - 11 桜塚古墳群 岡町南遺跡

調査日：平成 26 年（2014 年）4 月 17 日

調査場所：豊中市岡町南 2 丁目 83 - 8

調査対象面積：51.39 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 103 cm において基礎層を検出し、その上面で遺構（ピット）を確認した。

調査後の処置：基礎掘削が遺構検出面に達しないことから、再立会后、慎重工事を指示。



第 75 図 トレンチ掘削状況



第 76 図 トレンチ断面図

### 2014 - 12 穂積遺跡

調査日：平成 26 年（2014 年）5 月 18 日

調査場所：豊中市服部寿町 3 丁目  
1408 - 5

調査対象面積：56.70 m<sup>2</sup>

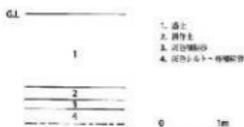
調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 180 cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 77 図 トレンチ掘削状況



第 78 図 トレンチ断面図

## 2014 - 13 野畑春日町古墳群

調査日：平成 26 年(2014 年) 5 月 15 日  
 調査場所：豊中市春日町 4 丁目 78 - 30  
 調査対象面積：59.89 m<sup>2</sup>  
 調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。  
 調査の概要：掘削深度（地表下 45 cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。  
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 79 図 トレンチ掘削状況



第 80 図 トレンチ断面図

2014 - 14 桜塚古墳群  
岡町南遺跡

調査日：平成 26 年(2014 年) 5 月 15 日  
 調査場所：豊中市岡町南 2 丁目 41 の一部  
 調査対象面積：78.04 m<sup>2</sup>  
 調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。  
 調査の概要：地表下 5 cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。  
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 81 図 トレンチ掘削状況



第 82 図 トレンチ断面図

2014 - 15 桜塚古墳群  
岡町北遺跡

調査日：平成 26 年(2014 年) 5 月 22 日  
 調査場所：豊中市岡町北 2 丁目 29 - 3  
 調査対象面積：38.11 m<sup>2</sup>  
 調査の方法：重機により筋掘りトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。  
 調査の概要：地表下 30 cm において基盤層を検出したが、古墳関連の明確な遺構・遺物等は確認されなかった。  
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 83 図 トレンチ掘削状況



第 84 図 トレンチ断面図

## 2014 - 16 桜塚古墳群 岡町遺跡

調査日：平成 26 年（2014 年）5 月 22 日

調査場所：豊中市中桜塚 2 丁目 434 の一部  
434 - 2 の一部

調査対象面積：99.52 m<sup>2</sup>

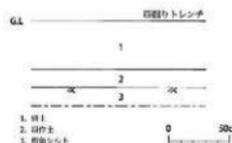
調査の方法：重機により筋振りトレンチ 1  
か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 55 cm において基盤層  
を検出したが、古墳関連・集落関連の明  
確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 85 図 トレンチ掘削状況



第 86 図 トレンチ断面図

## 2014 - 17 穂積遺跡

調査日：平成 26 年（2014 年）6 月 5 日

調査場所：豊中市服部西町 4 丁目 237 - 6

調査対象面積：36.45 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を  
掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 160 cm）内  
において、明確な遺構・遺物等は確認さ  
れなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 87 図 トレンチ掘削状況



第 88 図 トレンチ断面図

## 2014 - 18 桜塚古墳群

調査日：平成 26 年（2014 年）7 月 3 日

調査場所：豊中市中桜塚 4 丁目 69 - 7

調査対象面積：58.32 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋振りトレンチ 1  
か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 20 cm において基盤層  
を検出したが、明確な遺構・遺物等は確  
認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 89 図 トレンチ掘削状況



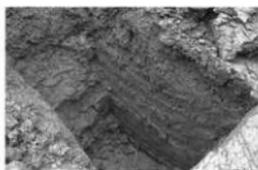
第 90 図 トレンチ断面図

## 2014 - 19 上津島遺跡

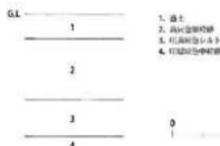
調査日：平成 26 年(2014 年) 8 月 28 日  
 調査場所：豊中市上津島 2 丁目 130 - 9  
 調査対象面積：55.85 m<sup>2</sup>  
 調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下 200 cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 91 図 トレンチ掘削状況



第 92 図 トレンチ断面図

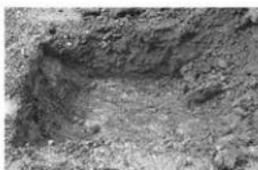
## 2014 - 20 本町遺跡

調査日：平成 26 年(2014 年) 9 月 4 日  
 調査場所：豊中市本町 3 丁目 297 - 3 の一部  
 調査対象面積：51.65 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下 40 cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：建物の基礎は盛土内におさまることから、確認調査後、着工を指示。



第 93 図 トレンチ掘削状況



第 94 図 トレンチ断面図

## 2014 - 21 内田遺跡

調査日：平成 26 年(2014 年) 9 月 11 日  
 調査場所：豊中市柴原町 3 丁目 149  
 調査対象面積：70.23 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 40 cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 95 図 トレンチ掘削状況



第 96 図 トレンチ断面図

### 2014 - 22 北条遺跡

調査日：平成 26 年（2014 年）9 月 18 日

調査場所：豊中市小曾根 2 丁目  
1754 の一部

調査対象面積：121.40 m<sup>2</sup>

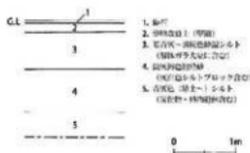
調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 190 cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 97 図 トレンチ掘削状況



第 98 図 トレンチ断面図

### 2014 - 23 柴原遺跡

調査日：平成 26 年（2014 年）9 月 25 日

調査場所：豊中市刀根山 2 丁目 224 - 3

調査対象面積：52.86 m<sup>2</sup>

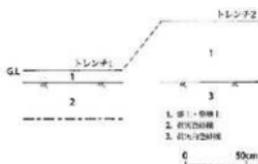
調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 10・50 cm において基礎層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 99 図 トレンチ掘削状況



第 100 図 トレンチ断面図

### 2014 - 24 桜塚古墳群

調査日：平成 26 年（2014 年）9 月 25 日

調査場所：豊中市中桜塚 1 丁目  
229 - 1 の一部

調査対象面積：94.82 m<sup>2</sup>

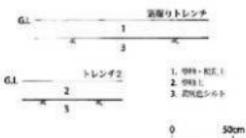
調査の方法：重機により坪掘りトレンチ 1 か所・筋掘りトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 15 cm において基礎層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



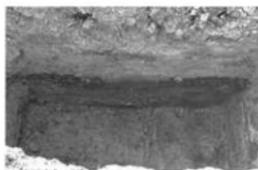
第 101 図 トレンチ掘削状況



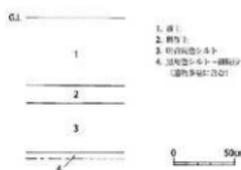
第 102 図 トレンチ断面図

## 2014 - 25 上津島川床遺跡

調査日：平成26年(2014年)10月23日  
 調査場所：豊中市利倉3丁目134-5,6  
 調査対象面積：57.08㎡  
 調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。  
 調査の概要：地表下110cmにおいて遺物包含層（遺構埋土）を検出した。  
 調査後の処置：設計変更により建物基礎が遺物包含層に達しないことから、確認調査後、慎重工事を指示。



第103図 トレンチ掘削状況



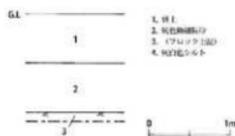
第104図 トレンチ断面図

## 2014 - 26 新免遺跡

調査日：平成26年(2014年)10月30日  
 調査場所：豊中市末広町2丁目1-7,8,9  
 調査対象面積：23.31㎡  
 調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。  
 調査の概要：地表下120cmにおいて基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。  
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第105図 トレンチ掘削状況



第106図 トレンチ断面図

## 2014 - 27 桜塚古墳群

調査日：平成26年(2014年)11月27日  
 調査場所：豊中市南桜塚1丁目23-1  
 調査対象面積：72.04㎡  
 調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。  
 調査の概要：掘削深度（地表下25cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。  
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第107図 トレンチ掘削状況



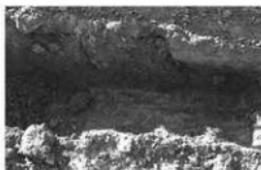
第108図 トレンチ断面図

### 2014 - 28 曾根遺跡

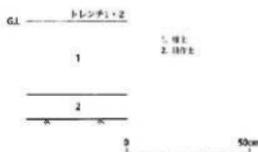
調査日：平成 26 年 (2014 年) 11 月 27 日  
 調査場所：豊中市曾根西町 4 丁目 73 - 8.9  
 調査対象面積：111.10 m<sup>2</sup>  
 調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 40 cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：建物の深基礎部分においては遺構等が検出されなかったことから、確認調査後、着工を指示。



第 109 図 トレンチ掘削状況



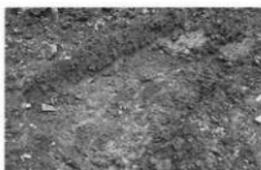
第 110 図 トレンチ断面図

### 2014 - 29 桜塚古墳群

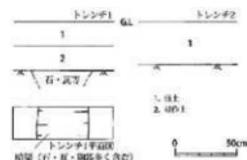
調査日：平成 26 年 (2014 年) 12 月 4 日  
 調査場所：豊中市中桜塚 2 丁目 5 - 2  
 調査対象面積：44.55 m<sup>2</sup>  
 調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ 1 において、多量の瓦片等を伴う暗渠を検出した。

調査後の処置：建物の基礎は盛土内におさまることから、再立会后、慎重工事を指示。



第 111 図 トレンチ掘削状況



第 112 図 トレンチ断面図

### 2014 - 30 庄内遺跡

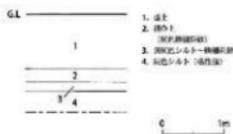
調査日：平成 26 年 (2014 年) 12 月 18 日  
 調査場所：豊中市庄内幸町 3 丁目 63 - 11  
 調査対象面積：53.86 m<sup>2</sup>  
 調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度 (地表下 160 cm) 内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 113 図 トレンチ掘削状況



第 114 図 トレンチ断面図

## 2014 - 31 桜井谷竈跡群

調査日：平成26年(2014年)12月25日

調査場所：豊中市桜の町2丁目40-45

調査対象面積：26.57㎡

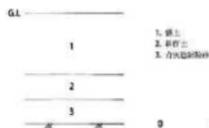
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下90cmにおいて基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第115図 トレンチ掘削状況



第116図 トレンチ断面図

## 2014 - 32 鳥江遺跡

調査日：平成26年(2014年)12月25日

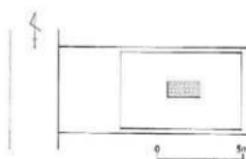
調査場所：豊中市庄内柴町4丁目56-22

調査対象面積：28.91㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下210cm)内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第117図 トレンチ配置図



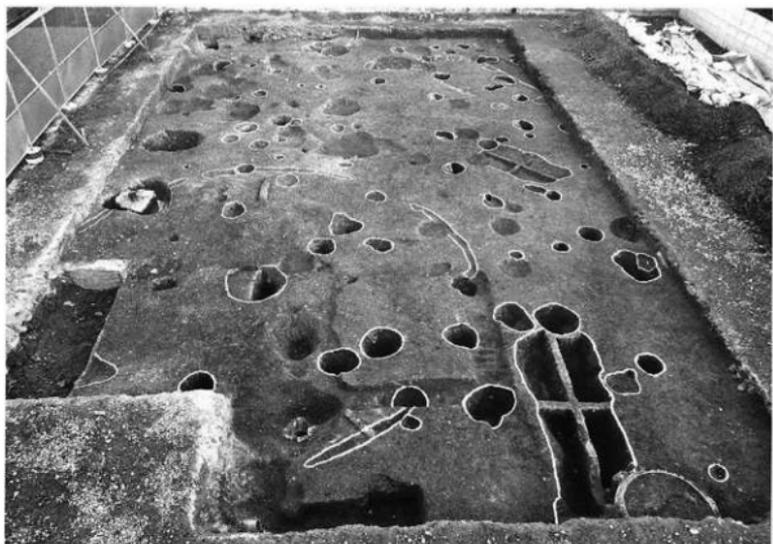
第118図 トレンチ断面図



# 写 真 图 版



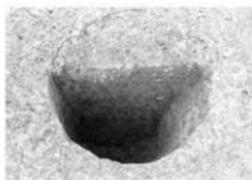
(1) 遺構検出状況 (西から)



(2) 遺構穴掘状況 (西から)



(1) 竪穴住居2 (北から)



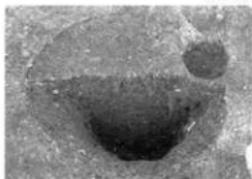
SP-66



SP-69



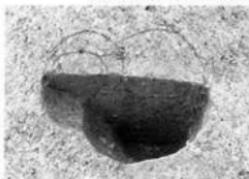
SP-69 遺物出土状況



SP-74



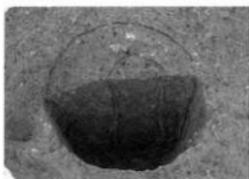
SP-12



SP-17・18



SP-8



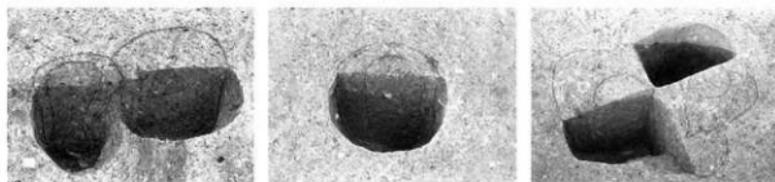
SP-38



SP-39

(2) 柱穴等断面

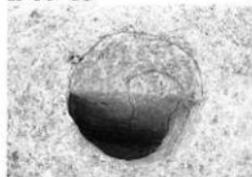
図版3 新免遺跡第71次調査



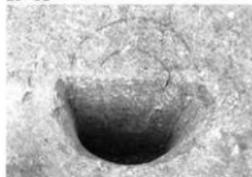
SP-14・80

SP-49

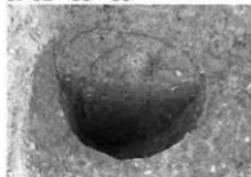
SP-52・59・60



SP-56



SP-63



SP-72

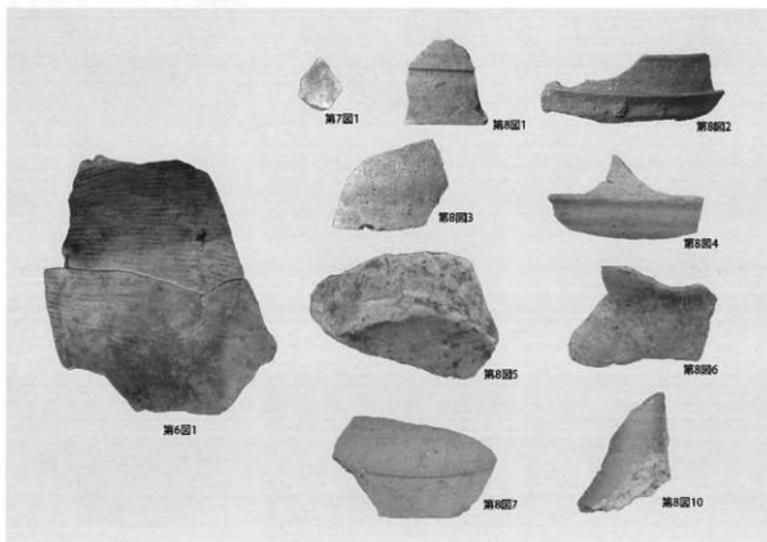


土坑1

(1) 柱穴・ピット・土坑断面



土坑2



(2) 出土遺物



(1) 調査区全景 (西側)



(2) SD01 全景

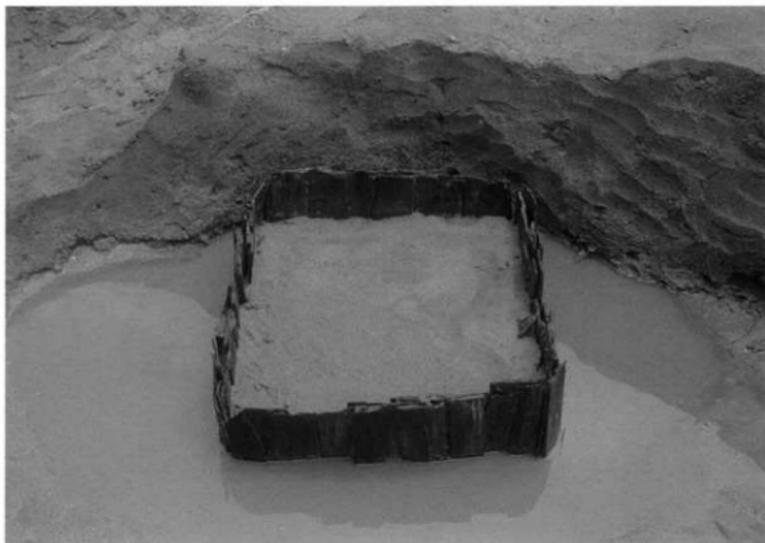
図版5 穂積遺跡第41次調査



(1) 調査区全景 (東側)



(2) SE01



(1) SE02



(2) SE05



(1) SE04 断面



(2) SE04 井戸枠



(1) SE06 井筒



(2) SE06 水溜



(1) SE08



(2) SE09



(1) 第1面 完掘状況 (東から)



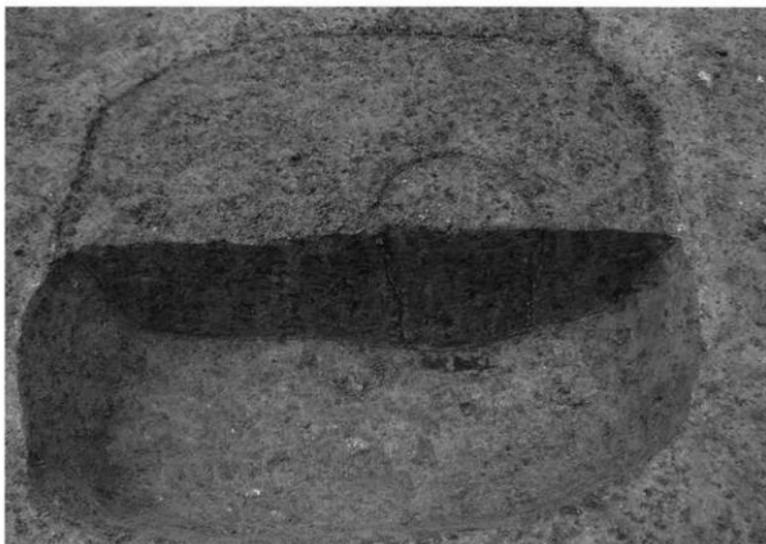
(2) 第1面 土坑1断面 (南から)



(1) 第 2 面 遺構検出状況 (東から)



(2) 第 2 面 遺構完掘状況 (東から)



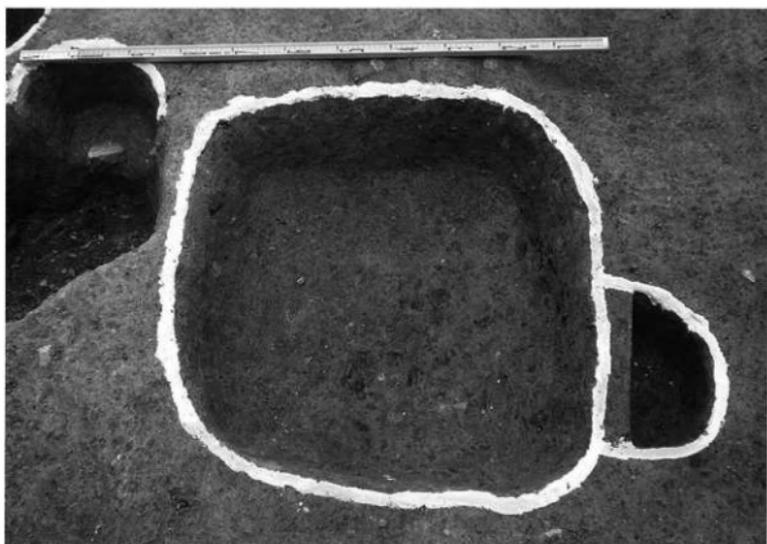
(1) 第 2 面 柱穴 1 断面 (東から)



(2) 第 2 面 柱穴 2 断面 (東から)



(1) 第 2 面 柱穴 3 断面 (東から)



(2) 第 2 面 柱穴 3 完掘状況 (北から)



(1) 第 2 面 柱穴 4 断面 (西から)



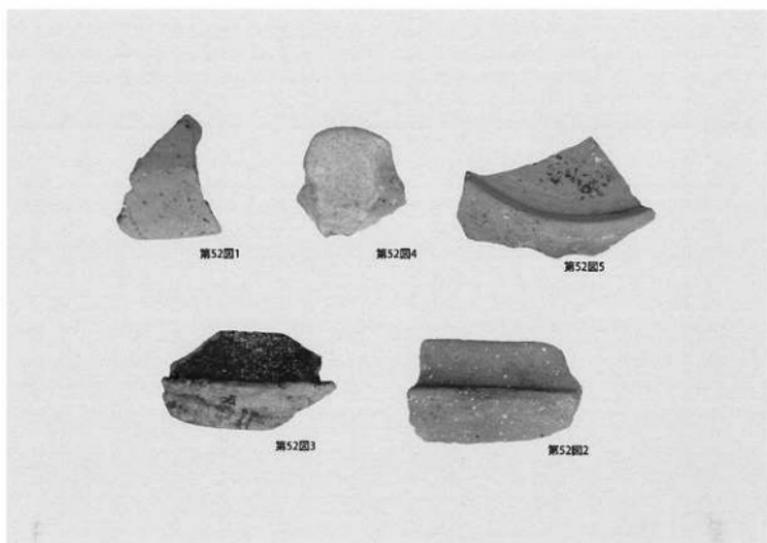
(2) 第 2 面 柱穴 5 断面 (西から)



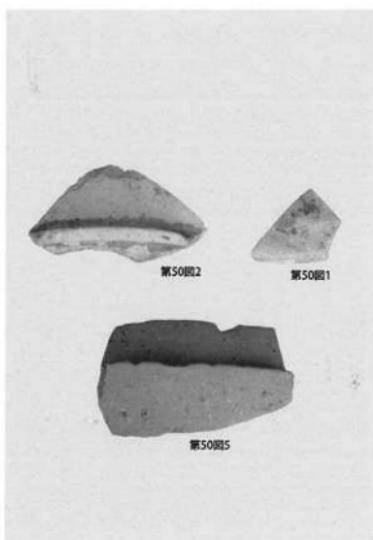
(1) 第 2 面 柱穴 4 出土須恵器 (第 50 図 6)



(2) 第 2 面 柱穴 18 出土須恵器 (第 50 図 3)



(1) 遺物包含層出土遺物 (第 52 図 1 ~ 5)



(2) 第 2 面 遺構出土遺物 (第 50 図 1・2・3)



(3) 遺物包含層出土遺物 (第 52 図 6)

## 報告書抄録

ふりがな	とよなかし まいぞうぶんかざい はくつつちょうさ がいよう					
書名	豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成26年度(2014年度)					
シリーズ名	豊中市文化財調査報告					
シリーズ番号	第71集					
編者	陣内高志・服部聡志・橋田正徳・浅田尚子					
編集機関	豊中市教育委員会(市町村コード27208)					
所在地	〒561-8501 大阪府豊中市中樞塚3丁目1-1 TEL06-6858-2581					
発行年月日	平成27年(2015年)3月31日					
所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
新免遺跡 第71次	玉川町2丁目 184-5	34°47'5"	135°27'32"	20131106～ 20131228	95.3㎡	個人住宅建築
穂積遺跡 第41次	服部西町2丁目 838-1・2	34°45'31"	135°28'32"	20140616～ 20140811	202㎡	共同住宅建築
蛭池遺跡 第10次	蛭池中町2丁目 58-4	34°47'23"	135°27'07"	20140825～ 20140922	43.4㎡	個人住宅建築
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
新免遺跡 第71次	集落跡・古墳群	縄文～鎌倉	竪穴住居・獨立 柱建物・土坑	弥生土器・土師器・ 須恵器・製塩土器	弥生時代中期・古墳時代後期の 集落関連遺構を検出	
穂積遺跡 第41次	集落跡	縄文～近世	土坑・溝・井戸	弥生土器・須恵器・ 土師器・瓦葺板	弥生時代終末期～平安時代中期の 集落関連遺構を検出	
蛭池遺跡 第10次	集落跡	古墳・平安～中世	獨立柱建物・溝	須恵器	古墳時代後期～奈良時代の 集落関連遺構を検出	

---

豊中市文化財報告 第71集  
豊中市埋蔵文化財発掘調査概要  
平成26年度(2014年度)  
発行：豊中市教育委員会  
豊中市中桜塚3丁目1-1  
平成27年(2015年)3月31日  
印刷：きたがわぶりと

---

